

国道バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成 9 年度

1998. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度
正誤表

頁	行	誤	正							
4	表 1	トレンチ	トレンチ							
		A-6	6							
		A-7	7							
		A-8	8							
		A-9	9							
		A-10	10							
		A-11	11							
		A-12	12							
		A-13	13							
		21	表 3	規模	規模	主体部	規模	社の特・数量	主体部	
				9	周溝墓9と埋土共有		9			周溝墓8と埋土共有
				10 (5前後)			10			7.5前後
				15			15			
18 4.5m×4.0				18	4.5m×4.0					

冊12

例 言

1. 本書は国道バイパス建設に伴い、平成9年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要を記録したものである。本年度は、白梅（しろうめ）遺跡、佐古川・窪田（さこがわ・くぼた）遺跡の発掘調査と、綾南バイパスA～D地区の予備調査、綾歌バイパス馬指（うまさし）地区・栗熊（くりくま）地区の予備調査、および鴨部・川田（かべ・かわた）遺跡の整理作業を実施した。

2. 本事業は、建設省四国地方建設局から委託を受け、調査主体 香川県教育委員会、調査担当 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの、本事業に関する調査体制は次のとおりである。

総括 所 長	大森忠彦
次 長	小野善範
総務 参 事	別枝義昭
副主幹兼係長	田中秀文（平成9年6月1日～）
係 長	前田和也（～平成9年5月31日）
主 事	細川信哉
調査 参 事	近藤和史
調査主任	藤好史郎
文化財専門員	大久保徹也
文化財専門員	佐藤竜馬
文化財専門員	川井國博
調査技術員	中山尚子

4. 調査にあたっては、次の機関の御協力と各位の御教示を得た。記して感謝したい。

綾歌町教育委員会、綾歌町建設課、津畑池水利組合、水橋池水利組合、烏田・梨岡自治会、一丁地自超会、馬指A自治会、馬指B自治会、綾南町建設課、茶円原自治会、内間自治会、津山自治会、福向西の山自治会、開田水利組合、蓮池水利組合、綾南バイパス対策協議会（順不同）

石野博信・近藤武司・設楽博己・田崎博之・中村 弘・平井 勝・藤井裕之・本間元樹・山岸良二・山田清朝・吉田 広（五十音順、敬称略）。

5. 本書の執筆は、藤好・大久保・佐藤・川井・中山が行い、大久保・佐藤が編集した。

6. 挿図の一部に国土地理院発行地形図（1/25, 000普通寺・滝宮、1/5, 000国土基本図Ⅳ－F E 39・48・49）を使用した。

本 文 目 次

I. 平成9年度事業の概要(藤好).....	1
II. 国道32号バイパス建設に伴う発掘調査	
1. 予備調査(佐藤).....	2
2. 白梅調査(佐藤).....	7
3. 佐古川・窪田遺跡(佐藤・川井・中山).....	12
III. 資料整理の概要報告	
1. 鶴部・川田遺跡(大久保).....	38

挿 図 目 次

図1 調査区位置と周辺の遺跡.....	2	図14 Ⅲ区周溝墓群出土土器.....	24
図2 綾南バイパス予備調査地点位置図.....	3	図15 周溝墓21出土土器.....	25
図3 綾南バイパス予備調査地点, 本調査地点 位置図.....	4	図16 弥生時代の石器.....	25
図4 馬指地区予備調査トレンチ配置図・9ト レンチ土層図.....	5	図17 竪穴住居4平・断面図.....	26
図5 馬指地区出土遺物.....	6	図18 竪穴住居4平面出土土器.....	27
図6 白梅遺跡(綾南バイパスB地区)遺構配 置図.....	7	図19 竪穴住居1平・断面図.....	28
図7 SH01・SD01平・断面図.....	9	図20 建物2平・断面図.....	29
図8 綾南バイパス予備調査出土遺物.....	11	図21 大溝3上層断面図.....	30
図9 佐古川・窪田遺跡調査区割図, 土層柱状 図.....	13	図22 大溝3・4, 井戸1出土土器.....	31
図10 Ⅱ・Ⅲ区周溝墓群平面図.....	17	図23 大溝3上・中層出土土器.....	32
図11 周溝墓3主体部平・断面図.....	17	図24 井戸2平・断面見通し図.....	33
図12 周溝墓8主体部平・断面図.....	17	図25 井戸2出土土器.....	33
図13 V・Ⅵ区周溝墓群平面図.....	19	図26 想定される構築順序と「墓道」状の空地.....	34
		図27 弥生土偶.....	39
		図28 大型石鏝および打製大形尖頭器.....	40
		図29 磨製石剣.....	41
		図30 環状石斧.....	41

表 目 次

表1 平成9年度調査工程.....	1	表3 佐古川・窪田遺跡検出周溝墓一覧表.....	21
表2 馬指地区トレンチ一覧表.....	4	表4 石鏝型式別重量分布.....	39

写 真 目 次

写真1 SH01と外周溝SD01.....	8	写真12 周溝墓6壺出土状況.....	23
写真2 SH01東面遺物と中央ピット.....	8	写真13 周溝墓24鉢出土状況.....	23
写真3 SD01遺物出土状況.....	11	写真14 大溝3・4と掘立柱建物.....	27
写真4 大溝1土層堆積状況.....	15	写真15 大溝3中層流路.....	29
写真5 土坑1遺物出土状況.....	15	写真16 大溝3張り出し部.....	29
写真6 Ⅱ・Ⅲ区周溝墓群空中写真.....	16	写真17 大溝4須臾器出土状況.....	29
写真7 1群周溝墓.....	22	写真18 建物10.....	31
写真8 2群周溝墓.....	22	写真19 建物11に伴う小溝.....	31
写真9 2群周溝墓.....	22	写真20 土坑3.....	32
写真10 周溝墓2壺出土状況.....	23	写真21 井戸2隅柱と水溜め.....	32
写真11 周溝墓7鉢出土状況.....	23		

I. 平成9年度事業の概要

平成9年度の国道32号関係の埋蔵文化財の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成9年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。綾南バイパスと綾歌バイパス建設用地の調査で対象面積は9,000㎡であり、調査期間は平成9年4月1日～平成10年3月31日である。委託内容は、綾南バイパスで県教育委員会が調査により絞り込んだ、東から綾南町大字滝宮字中原に所在するA地区と、同町大字小野字白梅に所在するB～D地区の合計4箇所と、琴平電鉄栗熊駅付近の綾歌バイパス予定地の予備調査を先行実施し、その後工事工程上先行する綾南バイパス部、綾歌バイパスの佐古川・窪田遺跡の順序で調査を実施するものである。予備調査は4月から5月にかけて実施した。この時点では綾南バイパスの4地区の内、東側のA・B地区2箇所については用地買収が完了しており、B地区の白梅遺跡において弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。西側に位置するC・D地区については、一部で予備調査を実施したが、用地買収が未了のため調査を実施できなかった部分もあった。綾南バイパスの調査後、綾歌バイパスの綾歌町栗熊西の予備調査を実施し、平成8年7月と平成9年1月の香川県教育委員会が実施した試掘調査により確認した佐古川・窪田遺跡の発掘調査に平成9年5月28日に着手した。当初、佐古川・窪田遺跡の対象面積は5,685㎡の予定であったが、調査期間中に弥生時代前期末から中期初頭にかけての周溝墓群が存在することが明らかとなり、調査対象地より東側へ広がっている可能性が高くなってきたため、建設省香川工事事務所と協議を行い、路線内の対象地東側で確認を行った。その結果、佐古川・窪田遺跡の全面積は8,219㎡となり、その内6,844㎡を平成9年度に発掘することとなった。また、綾歌バイパスについては、馬指地区での予備調査を平成9年10月と10年3月に実施した。綾南バイパスについては、その後用地買収ができた綾南町大字小野字白梅のC地区の残りについて予備調査を10年3月に実施した。平成9年度の国道32号バイパス関係の発掘調査面積は8,955㎡である。

整理業務は、平成3年度に発掘調査を実施した、国道11号バイパス建設に伴う鴨部・川田遺跡について行った。(藤好)

区分	遺跡名	調査工程												
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
綾南バイパス	A地区	■												
	B地区(白梅遺跡)	■												
	C地区	■	■										■	
	D地区	■												
綾歌バイパス	栗熊地区予備調査		■											
	馬指地区予備調査							■					■	
	佐古川・窪田遺跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
整理	鴨部・川田遺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	

表1 平成9年度調査工程

II. 国道32号バイパス建設に伴う発掘調査

1. 予備調査

(1) 調査地点の位置 (図1)

綾南バイパス 綾南町西部の綾川西岸域の丘陵部にトレンチを設定した。調査地点は4つの丘陵部(A～D地区)に分け、順次調査に着手したが、用地買収の進捗状況からD地区の一部を今年度対象からは除外した。

綾歌バイパス 今年度は、本調査対象地(佐古川・窪田遺跡)東側の栗熊地区西半部と、馬指地区にトレンチを設定し、調査を行った。

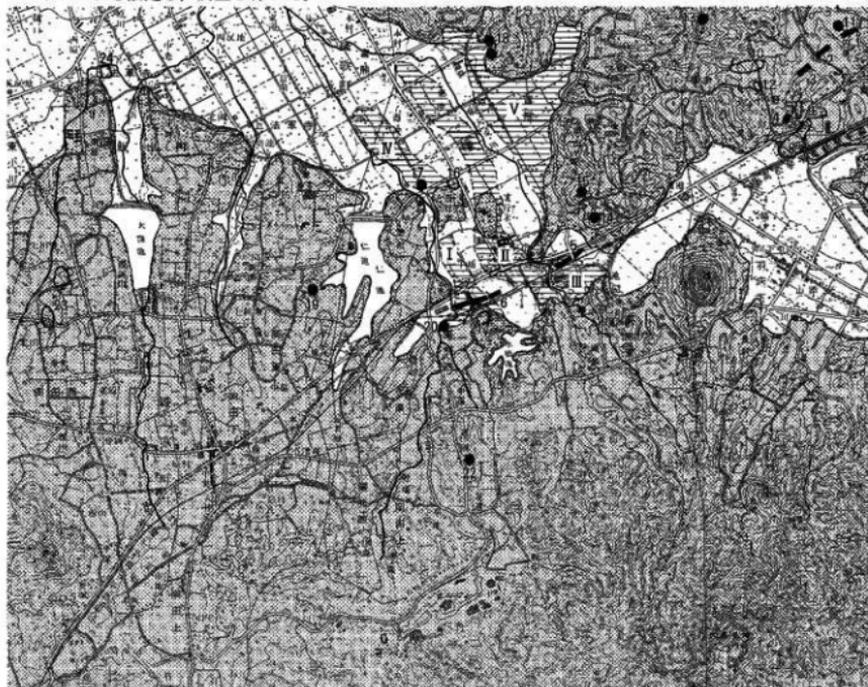


図1 調査区位置と周辺の遺跡 (S=1/30,000)

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|----------|------------|
| 1 綾南A地区 | 2 綾南B地区 | 3 綾南C地区 | 4 綾南D地区 | 5 馬指地区 |
| 6 栗熊地区 | 7 佐古川・窪田遺跡 | 8 浦山古墳群 | 9 白梅古墳群 | 10 小野内間古墳群 |
| 11 茶園原古墳 | 12 平山古墳群 | 13 奥川内2号墳 | 14 快天山古墳 | 15 薬師山古墳 |
| 16 行末遺跡 | 17 行末西遺跡 | 18 次見遺跡 | 19 北原古墳 | 20 佐古川遺跡 |
| 21 石塚山古墳群 | 22 宇閉神社古墳 | 23 岡田万塚古墳群 | 24 法融寺跡 | |

(2) 各地区の概要

綾南地区 いずれの地点でも開墾に伴う丘陵部の削平が顕著であり、A・C・D地区では遺構は全く検出できなかった。遺物も微量出土したのにとどまる。C地区の表土層からは弥生中期後半の高杯脚部(図8-10)が出土したが、器表の剥落が著しく、南側の丘陵頂部から転落してきた遺物とみられる。B地区では、B-2トレンチで竪穴住居と溝を検出したため、白梅遺跡と命名し調査区を拡張した(II-2参照)。



図2 綾南バイパス予備調査地点位置図 (S=1/10,000)

馬指地区 馬指川と東大東川に挟まれた微高地末端であり、南に向かって地形が緩やかに上がる。調査地点の東半(町道馬指・原線)の現地削平は、馬指川に向かう傾斜に規制された形態であるが、西半では条里型地割をとる。調査地点の東約0.3kmの堤山北麓には渡池(18世紀に干拓、中世段階に構築された可能性がある)の大規模な堤防が遺存している。馬宿川は元来、綾川から東大東川に至る不安定な河道であったと思われるが、渡池の構築によって用水路として固定された可能性がある。



図3 綾歌バイパス予備調査地点、本調査地点位置図 (S=1/10,000)

13本のトレンチを設定した結果、馬指川に近い1～3トレンチでは、砂もしくは砂礫を主体とした洪水堆積層が顕著に認められた。この層位は湧水が顕著であり、より下位への掘削が困難であったが、かなり腐食した弥生土器片が出土しており、弥生時代以降の堆積であるとみられる。なお、この洪水堆積層の上面に堆積した、比較的安定した層(暗褐色砂質土層)からは、瀬戸目茶碗片が出土している。

6トレンチ以西では、

トレンチ	検出層位	遺構内容	出土遺物
A-6	6層下面	旧河道(大溝?)2。SR01は埋没の最終段階で砂礫層を主体とする軽1m程度の大溝状の流路となる。SR02は幅2m。	SR01砂礫層から多量の弥生前期・後期土器。SR02から弥生後期土器。
	6層上面	旧河道1。SR03の幅14m。埋土は水田層の可能性もあり。	SR03より須恵器・9～10世紀の土師器
A-7	6層下面	溝1、ピット2。	
	6層上面	溝1(中世)	
A-8	6層下面	旧河道(大溝?)1、溝2	SR弥生後期土器
A-9	6層下面	ピット1	
	6層上面	溝4	
	6層上面	溝1(中世)	
A-10	6層下面	土坑6。淡黒褐色系の細砂を埋土とし、ベース土との識別やや困難。	土坑2基からササカイト剥片
	6層上面	溝1	
A-11	6層下面	溝3。うち1条はベース土の落ち込みか?	
	6層上面	溝1。坪塚に相当する溝か。	
A-12	6層下面	旧河道(大溝?)1。A-8トレンチの旧河道と同一流路の可能性あり	
A-13	6層下面	土坑4・ピット6。埋土は淡黒褐色系の細砂。	土坑1基に弥生前期土器の大型の破片あり(未掘)。

表2 馬指地区一覽表

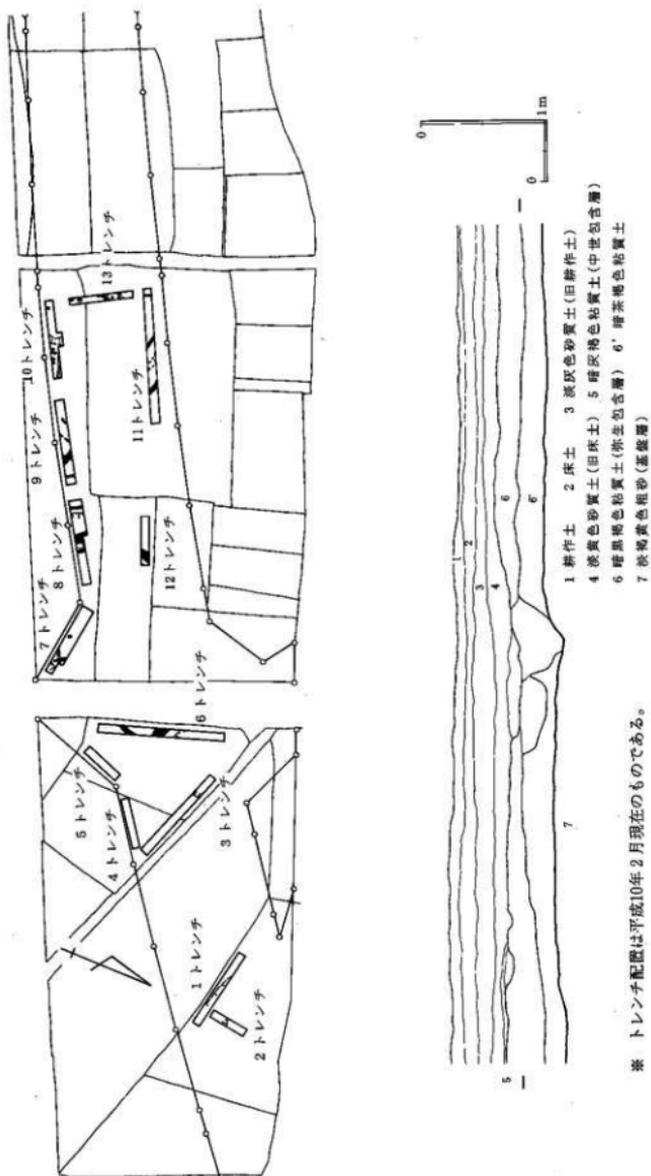


図4 馬指地区予備調査トレンチ配置図 (S=1/1,000)・9トレンチ土層図 (縦S=1/20, 横S=1/40)

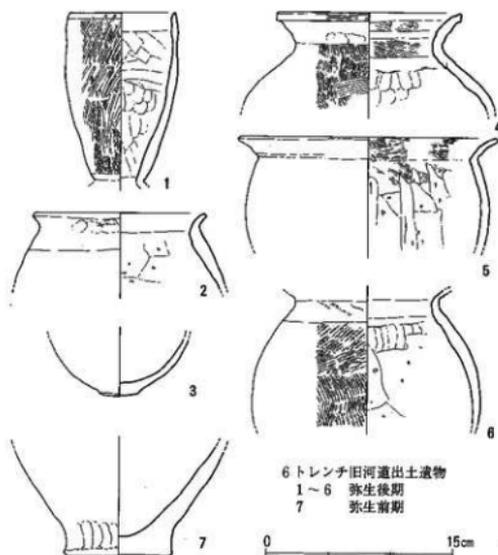


図5 馬指地区出土遺物 (S=1/4)

安定した層位が卓越するようになる。基盤層に至る土層は、図4に示したように6層に分けられる。遺構が検出されたのは、6層の上面と下面であった。6層上面の遺構は中世、下面の遺構は弥生時代である。

1~5層は水平堆積であり、3~5層では少量ながら12~15世紀の黒色土器碗、土師質土器小皿・播鉢・鍋・足釜が出土する。3層は1~3トレンチにみられた、暗褐色砂質土層に対応する可能性が高い。3・4層は水田に関わる耕作土の可能性があるので、中世後半に氾濫原をも含む広範な耕地開発が行われたことも想定できる。なお、6トレンチでは、5層下位で北に向かって暗灰色系の粘土もしくはシルトが堆積しており、古墳時代の須恵器と古代(9・10世紀)の土師器鍋が出土した。古代のうちに形成された層で

あろうが、埋没河道を利用した水田層の可能性も考慮しておく必要がある。6層は、弥生時代前期と後期後半の土器・ササカイトを多量に含む遺物包含層である。弥生土器の包含状況は大型の破片が多く、磨滅したものはない。

遺構は、6トレンチ以西でかなりの密度で検出された。東半では旧河道や溝が多く、西端の10・13トレンチで土坑・ピットが集中する傾向にある。13トレンチ以西は、平成10年2月現在、調査中である。遺構の多くは6層下面で検出された弥生時代のものであるが、7・9・11トレンチでは6層上面で条里型地割に平行する小溝が検出された。おそらく中世であろう。各遺構については、表2を参照されたい。

以上を踏まえると、対象地西側の微高地には弥生前期・後期の集落が広がり、東側は馬指川の旧河道とこれに平行・合流する溝群がみられる。集落の中心部は対象地の南隣接地と思われるが、遺構の分布状況や遺物の包含状況からみて小規模な集落とは思われない。本地点の東約300mの丘陵上にある、快天山古墳出現前史の集落動向を示す良好な資料となろう。やがて古代・中世には次第に馬指川周辺の埋積が進み、耕地化が進展していったようであり、渡池の構築(馬指川の固定)との関連が注目される。

粟館地区 佐古川・窪田遺跡がある微高地と、馬指地区の微高地との間に挟まれた幅広い谷部にあたる。地元では、近代まで付近は排水条件の悪い湿地であったと伝えられており、現地表面にみられる条里型地割の上限、また佐古川・窪田遺跡からの遺構の連続の有無が問題となった。トレンチ配置と土層堆積状況は、図9に示したとおりである。

調査の結果、耕作土直下には人為的な盛土層(3層)がみられ、この層によって谷部の嵩上げと平坦化が行われたことがわかった。その下には暗黒色系粘土(4・5層)が堆積しており、わずかに中世前

半の土師質土器杯・足釜片を包含していた。しかしこの層の上面では畦畔状の凹凸は認められず、また強粘性の土質であることから、水田土壌とみるよりも湿地の自然堆積土とみる方が妥当であろう。

遺構は、6トレンチで中世頃とみられる土坑1基が検出されたのにとどまり、現地割の坪境付近では地割と合致する溝は全くみられなかった。

以上から、中世前半を上限とする時期に、対象地付近の谷部がなお湿潤な環境にあったことがわかり、安定した耕地化は行われていなかったことが推測された。これは、地元の伝承とも大きく矛盾せず、現地割は近代以降の整地を伴う耕地化の際に、周辺地割を延伸するかたちで成立したと考えられるのである。

なお、佐古川・窪田遺跡との連続関係は、3-(2)を参照されたい。

2. 白梅遺跡

(1) 遺跡の位置

白梅遺跡は、竜王山(標高255.1m)から南東方向に延びる丘陵部に位置する。現在、遺跡周辺の丘陵上には水田が広がるが、これは溜池とその補助水源である府中湖の水利が整備された昭和期以降の風景であり、それ以前は狭い畑地として開墾されていたという。遺跡の両側の谷筋は、浦山と呼ばれる独立丘陵の間を縫うように南進した後、両岸が渓谷状に浸食された綾川に出る。一方、遺跡の西側を尾根伝いに抜けると、傾斜が緩やかに幅広な谷部を経て条里型地割の広がる羽床盆地北端に至る。平野の末端に接した山間部の遺跡といえよう(図2)。

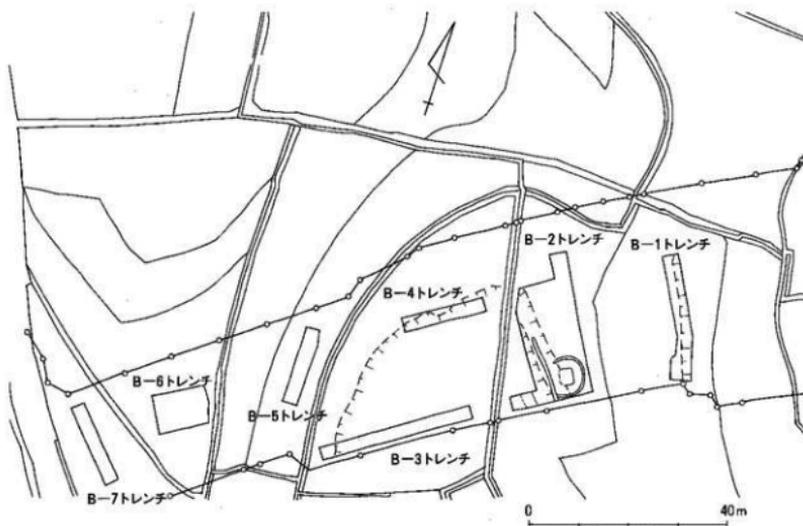


図6 白梅遺跡(綾南バイパスB地区)遺構配置図

こうした地理環境を反映してか、本遺跡の直近には弥生時代の集落遺跡は知られておらず、専ら墳墓の集中する地域といえる。浦山12号墳は丘陵切断部に列石を伴い、弥生後期ないし古墳前期にあたる可能性がある。古墳前・中期には、奥川内2号墳（前方後円墳：全長29m）や小野内間2号墳（円墳：直径18m）、茶園原古墳（仮称、鉄鍬出土）など、比高差のある尾根上に構築された古墳が展開する。白梅古墳群や浦山古墳群は、中期～後期前半の群集墳であり、後者には古式の横穴式石室（6世紀中葉）がみられる。平山古墳群は、小規模な後期群集墳とみられる。奥川内2号墳は、横山・横峰山塊の前方後円墳群の一環として捉える必要があり、より広域な地域を基盤とした首長墓といえるかもしれない。それ以外の古墳については、羽床盆地北部を基盤とした集団による、断続的な造墓活動の所産という評価が与えられよう。

(2) 遺構・遺物

今回の調査では、やや下った尾根上より弥生時代後期の竪穴住居1棟とこれに伴う外周溝、また時期不明の溝1条が検出された。尾根上は全体に削平が顕著であり、特に頂部は下位の基盤層まで削り取られていた。このため、検出遺構の周辺に本来、若干の遺構が存在した可能性も否定できないが、谷部の埋積土にほとんど遺物が含まれていなかったことを考慮するならば、遺構の分布は極めて希薄であるとみて大過なからう。

SH01 平面長方形を呈する竪穴住居である。北・東・西の各辺には先行する住居の痕跡がみられることから、先行する住居を1次住居、後出するものを2次住居として記述する。2次住居は長径3.35m、短径2.37m、検出面からの深さ0.13mを測る、長方形プランの小型住居である。各辺には壁溝がみられるが、完周していない。床面には主柱穴などのピットは全く検出できず、掘り込みを伴う柱をもたない簡易な構造であったことが想定できる。床面中央では、長径1.15m、短径0.87mを測る、平面楕円形の中央ピットが検出された。

中央ピットの外縁には、幅0.3～0.5m、高さ0.06mの土堤状の盛り上がりが見られる。土堤部分まで含めると、中央ピットは床面積のかなりの部分を占めることになる。土堤は基盤層に近い土を盛って作られており、土堤壁面に明確な被熱した痕跡が認められる。また、内部の埋土には炭化物が多量に含まれており、顕著に焼固した焼土塊も出土している。なお土堤直下に炭灰層の堆積がみられることから、先行する中央ピットが存在したことがわかる。1次住居に伴う可能性があろう。

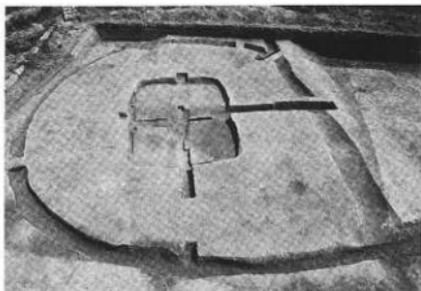


写真1 SH01と外周溝SD01

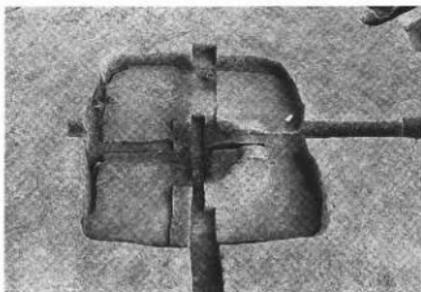


写真2 SH01床面遺物と中央ピット

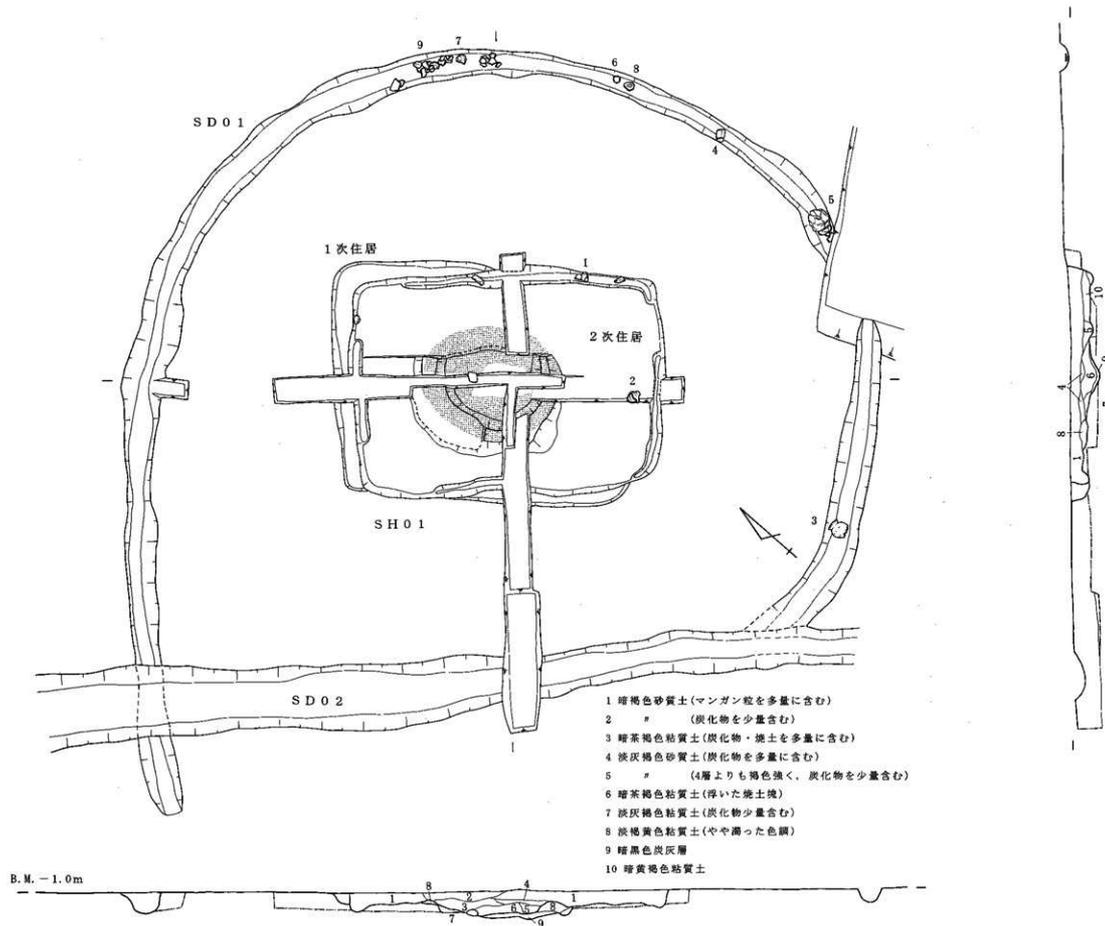


図7 SH01・SD01平・断面図

2次住居床面ならびに埋土中から、若干の遺物が出土している。中央ピットに接した床面からは、弥生土器台付鉢（図8-2）がほぼ完形で出土した。また、東壁溝沿いの床面より若干浮いた位置からミニチュアの甕（図8-1）が出土している。さらに埋土上位の第1層から、拳大の安山岩が出土した。加工した痕跡はないが、付近の基盤層には包含されていない石材であり、横山山塊で採取できるものと思われる。

1次住居は、長径3.05m、短径2.46mを測り、平面長方形を呈する。床面のレベルは2次住居よりも若干高い位置にある。壁溝はみられず、支柱穴についても存在しなかったと思われる。遺物は出土しなかった。

SD01 SH01を取り巻くように、外周溝SD01が巡る。幅0.22~0.4m、深さ0.2m前後を測り、SH01の北・東・南側では円弧状に回るが、西側ではやや直線気味に延びて谷斜面で途切れている。底面のレベルは東側（尾根側）が高く、西側（谷側）ほど低い。東側から南側にかけての溝底から弥生土器壺や甕がかなり大型の破片でまとも出土した。壺（図8-5）は、底部から体部下半が完存する。口縁部片（図8-4）と同一個体か。甕（図8-3）は、底部以外完存するが、底部が意図的な欠損によるのかどうかは、器表の遺存状況が悪いため明らかではない。SH01出土土器とともに、砂粒の多い「バサバサした」胎土をもち、精良な胎土の下川津B類土器はみられない。時期的には弥生時代後期に



写真3 SD01遺物出土状況

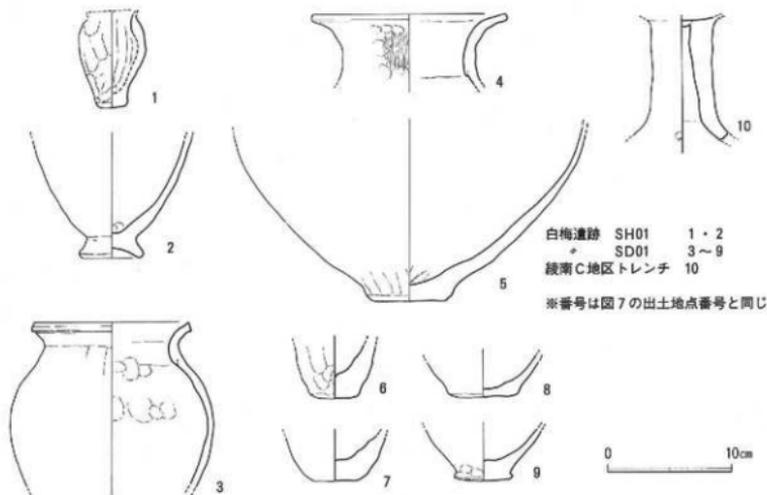


図8 綾南バイパス予備調査出土遺物

あたるものと思われる。

S D02 尾根から谷部へ落ちる傾斜変換部に沿って南北に延びる。S D01埋土を掘り込んでいることから、堅穴住居よりも後出する時期の遺構といえるが、出土遺物がないために詳細な時期については特定できない。

(3) まとめ

本遺跡の特徴は、継続的な集落の展開が希薄な地域に、小型堅穴住居が単独もしくはそれに近い状況で検出された点にある。堅穴住居は、明確な主柱穴ももたない簡易な構造であるにもかかわらず、壁面掘り込みや中央ピットに造り替えがみられることから、継続的な使用（居住）が窺える。さらに床面のかんりの部分を占め、あたかも居住性を無視したかのような中央ピットの在り方も特徴的である。これらは通常の集落の建物構成とは異質であり、直近に水田を伴わない丘陵部の小集団の集落形態を示すのか、あるいは平野部に拠点をもつ集落の作業小屋的な性格を考えるのが問題となろう。建物構成・住居形態（規模・構造）に留意した、地域内の集落類型化の中での位置付けが課題である。

3. 佐古川・窪田遺跡

(1) 遺跡の位置

佐古川・窪田遺跡は、丸亀平野南東部の大東川上流域に位置する。遺跡の西側には比高差約10mを測る岡田台地が広がり、東方から北方には綾川流域との境を面する横山とその支丘が延びる。さらに南側は大高見峰・猫山から延びてくる丘陵部である。遺跡周辺の栗熊・富熊地域は、これらの台地・山塊に囲まれて出口の狭い盆地状の一地域をなしている。

周辺の遺跡としては、行末遺跡・行末西遺跡・佐古川遺跡などで弥生前期の集落がみられ、Ⅱ-1-(2)で報告したように、馬指地区でもこの時期の遺構・包含層が確認されている。弥生前期に集落が増加することが窺えるが、これらは中期前半までは継続しないようである。弥生後期～古墳前期の集落は本遺跡のほかに佐古川遺跡、馬指地区などで確認されている程度であるが、猫山北麓の丘陵上に台状墓・古墳群が形成される。また、横山と山麓の丘陵部にも前方後円墳群が形成され、前期後半には3基の刳り抜き式石棺をもつ快天山古墳（前方後円墳：全長100m）が出現する。古墳中期から後期初頭にかけては、岡田台地西縁部で岡田万塚古墳群（約70基）が形成される。陶質土器や初期須恵器を伴う初期の群集墳であるが、位置的には土器川周辺の丸亀平野中央部に近く、栗熊・富熊地域の前期古墳群に接続するものか、判断が難しい。岡田台地東縁から横山山麓にかけては、北原古墳・薬師山古墳・地神山古墳群など、小規模な円墳が散在する程度である。後期古墳も実態不明部分が多いが、宇閑神社古墳は中規模の横穴式石室をもち、大型石室墳に次ぐ有力階層が存在したことを示す。

古代には岡田台地の先端微高地上に法敷寺が建立されるが、本遺跡からはややかけ離れた位置にあり、栗熊・富熊地域を基盤にした氏族の具体的な動きは不明である。宇閑神社が式内社であるとする意見もあるが、明確ではない。中世には史料に「栗熊庄」と見え、また堤山北麓の渡池の構築も中世と思われることから、この頃に地域開発が進捗したことが予想される。

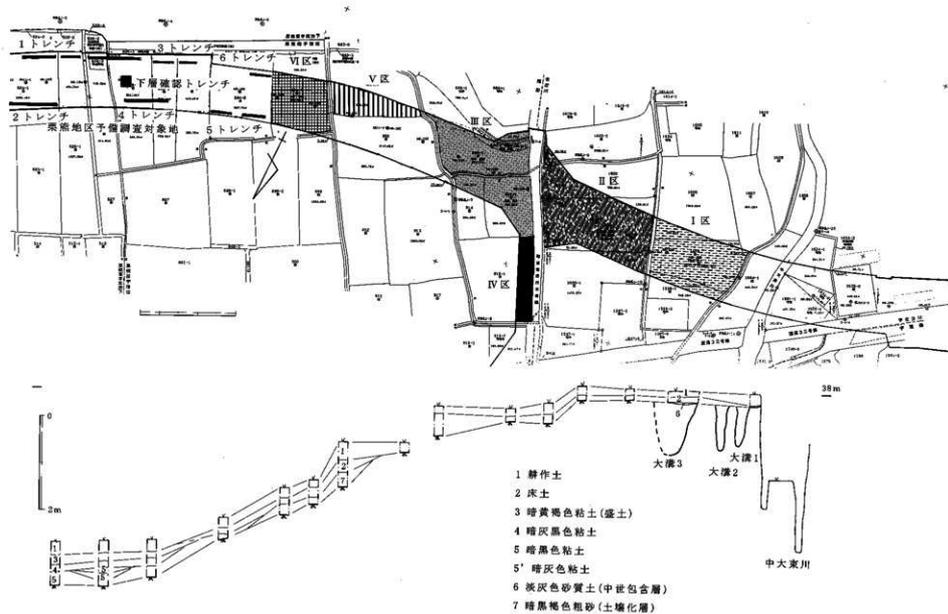


図9 佐古川・窪田遺跡調査区割図、土層柱状図 (S=1/1,500)

(2) 調査区割と基本層序

本調査対象地にⅠ～Ⅵ区の調査区を設定し、分割して調査を行った。各調査区の地形と土層の堆積状況は、図9を参照されたい。

調査区は、猫山北麓の尾根が急激に比高差を減じて微高地となる地点にあたる。尾根先端は、Ⅲ区西端部からⅡ区東半部にかけての地点に接しており、この付近の標高が最も高い。Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区は、微高地頂部から東に向かう緩やかな傾斜面であり、Ⅵ区以東は黒色系粘土が堆積する幅の広い谷底部である(予備調査栗熊地区1～6トレンチ)。この粘土層は極めて粘性が強く、Ⅴ・Ⅵ区の弥生包含層(もしくは土壌化層)の上に堆積すること、またわずかながら中世前半の遺物を含むことから、中世前半以降に恒常的な滞水状況下にあったことを示している。Ⅱ区東半部と谷底部(予備調査3トレンチ)との比高差は、3.4mである。

一方、Ⅱ区西半部からⅠ区にかけては、尾根裾部からはほぼフラットなまま西方に延び、Ⅰ区西端で中大東川の浸食した崖面に至る。Ⅰ区の遺構分布をみると、弥生時代～中世まで遺構はほぼ粗密なく分布しており、また埋没河道も検出されておらず、比較的高燥な土地条件にあったことが想定できる。

(3) 弥生時代前期の遺構・遺物

概要 当該期の遺構には、土坑4基、大溝1条、周溝墓25基がある。土坑はⅠ～Ⅲ区に散在しており、前期中葉～末葉の時期幅をもつ。建物関係の遺構は検出されていないが、土器の一括廃棄がみられる(土坑1)ため、調査区外の近傍に同時期の集落が存在する可能性は高い。大溝1は、Ⅰ区南西部から北東隅へ流れており、地形との関係では、微高地上を斜め方向に横断する。幅2.4m、深さ0.9mを測り、3層に大別できる。少量ながら出土遺物からみて、下層は弥生前期末葉頃とみられ、中層は弥生後期、上層は古墳後期に各々該当するようである。土層には、長期間にわたる頻繁な再掘削の痕跡をみることが出来る(写真4)。一方、周溝墓群はⅡ区東端からⅢ・Ⅴ・Ⅵ区で検出されており、微高地頂部から東側斜面にかけてみられる。

土坑1 Ⅰ区中央部で検出された。平面形態は不定形な土坑であり、長径1.25m、短径0.93m、深さ0.15mを測る。土坑内には、多量の弥生土器瓦片が折り重なるように遺存していた。器種は瓦にはほぼ限定され、ほかに瓦の蓋と小型の鉢が各1点出土している。瓦は逆L口縁をもち、体部上半に多条化(8・10・14条)したヘラ描き沈線文を施す。口縁端部と沈線下端には



写真4 大溝1土層堆積状況



写真5 土坑1遺物出土状況

刺突列点文がみられ、前期末の所産であることがわかる。

周溝墓群 25基の周溝墓が検出された。方形周溝墓15基と円形周溝墓10基からなる。調査区内での分布状況を見ると、周溝墓1～4の一群と周溝墓5～14・24の一群に分けることができるようである。各群では周溝墓が極めて近接するか、周溝を共有するなど、相互に強いまとまりの傾向を指摘することができる。またV区の周溝墓15～21・25とVI区の周溝墓22・23との間にも若干の空白域が存在するようであり、別の群とみられる。Ⅲ区とV区の間については来年度調査予定のため、周溝墓5～14・24と周溝墓15～21・25が別グループになるのか、同一グループになるのかは明確ではない。ここでは仮に別の群と捉えておく。以上から、周溝墓群を1群（周溝墓1～4）、2群（周溝墓5～14・24）、3群（周溝墓15～21・25）、4群（周溝墓22・23）に細別して記述する。なお、各周溝墓の形態・規模・出土遺物については、表3を参照されたい。

1群は、方形周溝墓1基と円形周溝墓3基から構成される。周溝墓2が最大で復元直径10.0mを測る。各周溝墓は近接しており、周溝墓2・3は大別2層の周溝埋土の下層を共有することから、ほぼ同時期の構築とみることができる。ただし、周溝墓2の周溝が深く周溝墓3のそれは浅く不定形なことから、周溝墓2の存在を前提として周溝墓3が構築された可能性が高い。周溝墓2は北端部分で溝が明瞭に途



写真6 Ⅱ・Ⅲ区周溝墓群空中写真

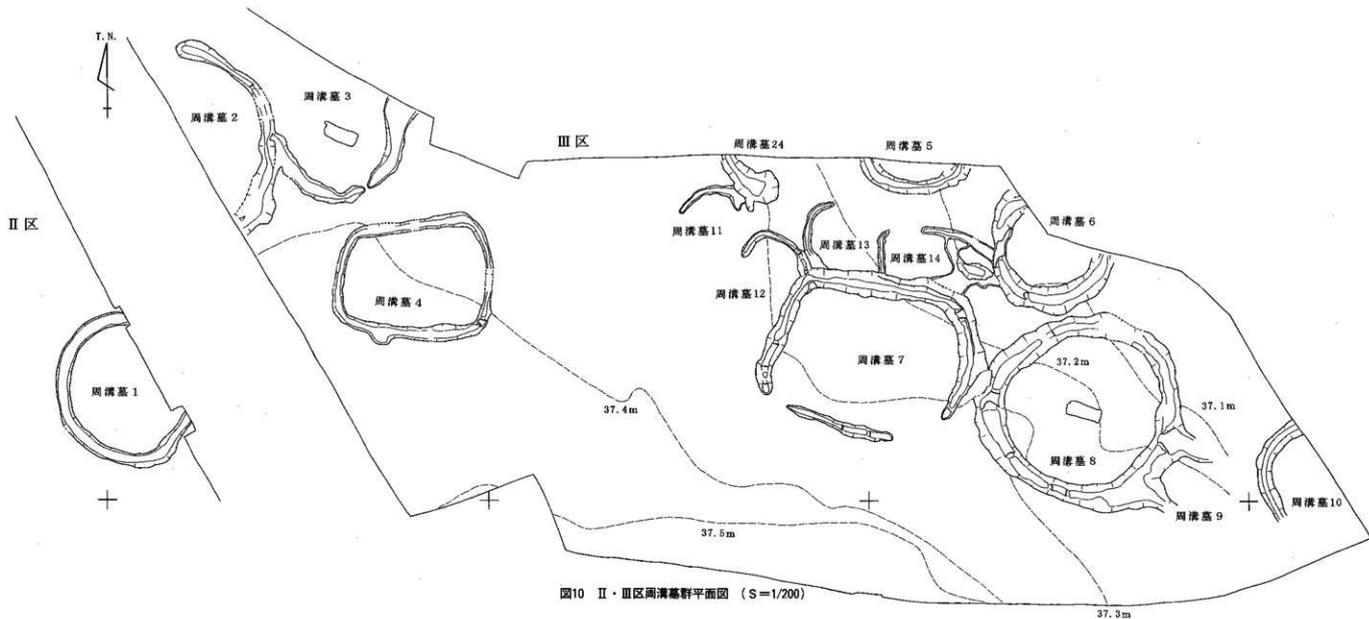


图10 II・III区周溝墓群平面图 (S=1/200)

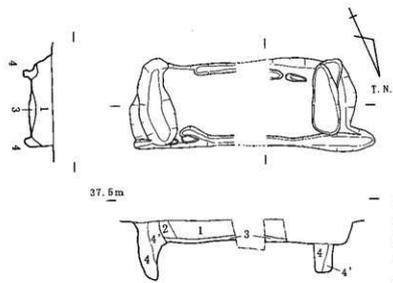


图11 周溝墓3主体部平・断面图 (S=1/30)

- 1 暗褐色粗砂
- 2 暗褐色粗砂
- 3 暗褐色粗砂(2層よりも粒径粗い)
- 4 暗褐色細砂(木棺痕。砂粒のきめ細かい)
- 4' 暗褐色粗砂(4層より粗く、2層よりも明るい色調)

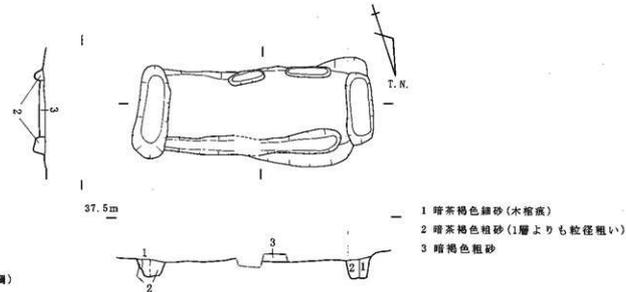


图12 周溝墓8主体部平・断面图 (S=1/30)

- 1 暗茶褐色細砂(木棺痕)
- 2 暗茶褐色粗砂(1層よりも粒径粗い)
- 3 暗褐色粗砂

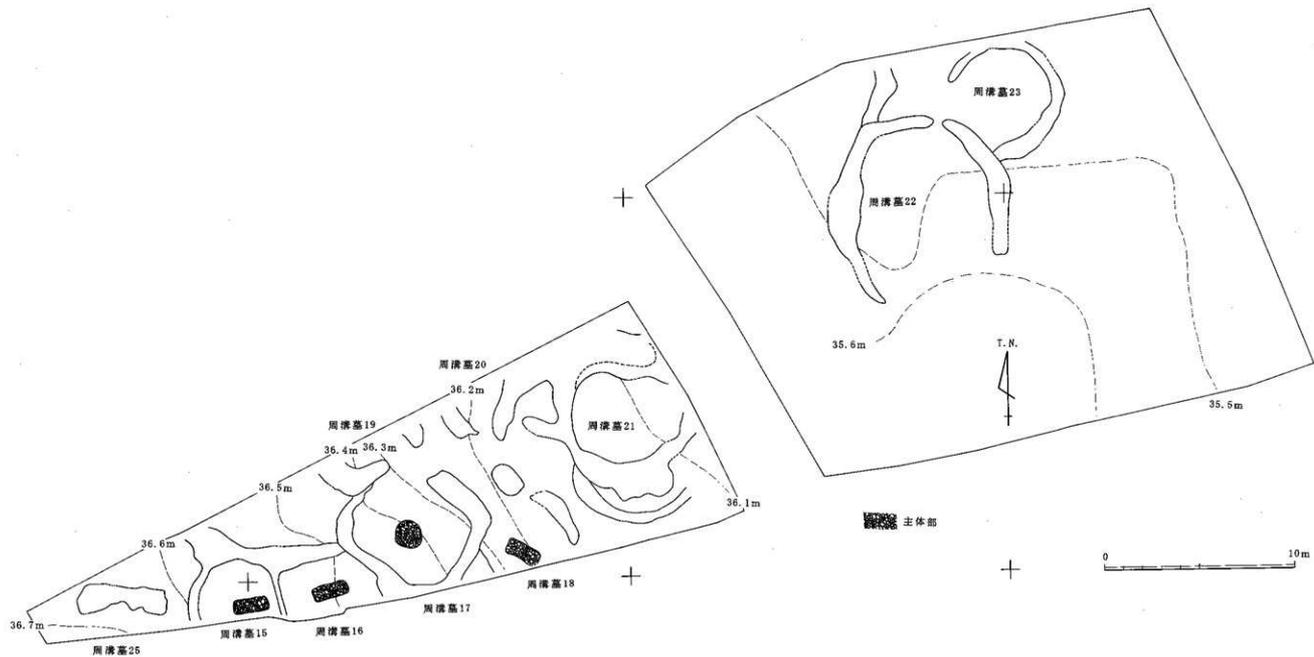


图13 V·VI区周塘基群平面图

周溝墓	墳 丘		周 溝		主 体 部		出 土 遺 物		時 期
	形 態	規 模 (m)	隆起状 溝底?	堀土の共有・重複関係	形 態	規 模 (m)	主体部	周溝内	
1	円 形	7.0×5.5以上						逆L口縁釜・ 鉢・石鏡	前期末
2	円 形	9.4以上	1					如意形口縁 釜	前期後葉
3	不整形円形	5.6×5.0以上	1	周溝墓2下層と堀土共有	木棺	1.75×0.7	管玉2	広口壺	前期後葉
4	長 方 形	7.7×5.6	2					弥生土器細 片	(前期末)
5	円 形	4.6以上						広口壺	前期末
6	円 形	5.2						広口壺・逆 L口縁釜	前期末～中 期初頭
7	長 方 形	9.5×7.3	3					鉢・石鏡	前期末
8	円 形	8.8×8.4	3		木棺	1.8×0.7		広口壺・逆 L口縁釜	前期末～中 期初頭
9	長 方 形	3.0×2.7		周溝墓9と堀土共有					前期末～中 期初頭
10	円 形 (5前後)								(前期末～中 期初頭)
11	長 方 形	3.6×2.5以上	1	周溝墓12と堀土共有?					前期末
12	長 方 形	3.4×2.1以上		周溝墓7上層と堀土共有					前期末
13	長 方 形	3.8×3.4以上	1?	周溝墓7上層と堀土共有					前期末
14	長 方 形	3.6×2.6	1	周溝墓7上層と堀土共有					前期末
15	長 方 形	4.4×3.0以上		周溝墓16と周溝共有	(木棺)	1.85×0.7			前期末
16	長 方 形	5.0×3.0以上			(木棺)	1.85×0.75			前期末
17	長 方 形	6.0×4.6	1	周溝墓16堀土を切り込む	土瘠	1.5			
18 (長方形)	4.5以上4.0	2?		周溝墓17と周溝共有	木棺? 1	1.8×0.75			前期末
19 (長方形)	3.25×	1							
20 (長方形)	3.0以上	1		周溝墓21と周溝共有?					(中期初頭)
21	円 形	6.0×5.7	1					無頭壺・広 口壺	中期初頭
22	長 方 形	9.0×6.6	1?	周溝墓23堀土を切り込む					
23	円 形	5.8	1					弥生土器細 片・石鏡	
24	円 形 (5前後)		1	周溝墓11堀土を切り込む				鉢	前期末
25 (方形)	(5前後)		?	周溝墓15と周溝共有?					

表3 佐古川・窪田遺跡検出周溝墓一覧表

墳丘規模は、周溝墓1～14・24が裾部（周溝底の墳丘側変換点）で計測したが、周溝墓15～23・25は調査中のため検出面で計測した。

主体部形態で（木棺）の表示は、現在調査中の木棺を伴うとみられる長方形土坑である。



写真7 1群周溝墓



写真8 2群周溝墓



写真9 2群周溝墓

切れており、後述するような陸橋状の掘り残しであるとみられる。また周溝墓3の中央では、木棺痕跡を明瞭に留めた主体部が検出された。主体部掘り方は良好に遺存しており、周溝最深度よりも低いレベルに木棺底板痕が確認できたが、これは最小の周溝径と深さから想定される、極めて低い墳丘高に起因するであろう。主体部内東半部の埋土下位（おそらく木棺底面付近）から、碧玉製の管玉2点（長さ1.05cm・直径0.45cm, 長さ0.95cm・直径0.4cm）が出土している。このことから、頭位は東の可能性があらう。周溝墓4は、北東隅と南東隅の周溝底面のレベルが浅くなっており、やはり掘り残し状になっている。

2群は、方形周溝墓6基と円形周溝墓5基から構成される。周溝墓7が最大で長径9.5m, 短径7.3mを測るが、周溝墓8も直径8.8mであり、両者の面積はほぼ同じである。各周溝墓は極めて近接しており、周溝墓7・8・6の周溝外縁ラインはほとんど接している。また、周溝の共有関係も顕著である。周溝墓7には、北辺と西辺に小型の方形周溝墓が各2基付随するが、土層の連続関係でみると北辺の周溝墓13・14の埋土が周溝墓7下層と同一であるのに対し、周溝墓12埋土は周溝墓7の上層と連続する。周溝墓11は、周溝墓12の西辺を利用して構築されているので、周溝墓12の存在を前提としていることは明らかである。また周溝墓13は周溝墓14の西辺溝を利用するため、前者が後者よりも後出する可能性がある。したがって、これらは周溝墓7→周溝墓14→周溝墓13→周溝墓12→周溝墓11という順序で構築されたことが推測できる。

周溝墓7は、南東・北東・南西の3隅で周溝底面が陸橋状に掘り残されており、北西隅も墳丘側がやや突出気味になっている。一方、周溝墓8も東側の小型方形周溝墓（周溝墓9）と周溝を共有する。周溝墓8の周溝底面は、東側・西側で明瞭な陸橋状を呈し、南側・北側でも弱い盛り上がりが見られる。円形周溝墓においても、方形周溝墓同様の周溝底面形態を示すことが取組める。また周溝墓8では、墳丘中心部で木棺痕跡を残す主体部が確認できたが、残存していた深さは極めて浅かった。このことは、主体部の掘り込まれる墳丘上面の位置がかな

り高いところにあったことを想定させ、極めて低い墳丘高を想定させた周溝墓3とは明確に異なる在り方といえよう。なお、周溝墓6・8では、周溝底面の一部が極端に深くなる部分があるが、堆積土はそれ以外の周溝埋土と連続しており、また木棺痕跡なども認められなかったため、いわゆる「溝内埋葬」の可能性は低いと思われる。

3群は、方形周溝墓7基と円形周溝墓1基からなる。周溝墓21が最大規模で直径約6.0mを測り、周溝墓17がこれに次ぐが、1・2群でみられたような明確な規模の格差はなく、全体的にはかなり均質な内容をもつといえよう。各々の位置関係は極めて近接し、かつ周溝を共有するものが多い。周溝墓15～19・25は、周溝を共有もしくは重複させており、にわかに構築順序を決めることは難しいが、埋土の重複状況からみたら案としては、周溝墓15・16→周溝墓17→周溝墓19という順序も考えられる。周溝墓17と19では、相互に接する部分で周溝が途切れており、陸橋状をなす。また、円形プランの周溝墓21も東側の周溝が浅くなって途切れており、方形・円形にかかわらず周溝の一部が途切れたり盛り上がるのは、1・2群と同様である。主体部は、周溝墓15～17・18で確認できた。このうち周溝墓15・16・18は、平面長方形の墓壙をもつことから木棺を埋葬施設とすることが想定されるが、周溝墓17では直径1.5mの平面円形の土坑が墳丘中央にあることから、木棺とは異なる型式の埋葬施設を伴うことが考えられる。なお、周溝墓21の南側周溝は幅が1.9mに拡張する部分があるが、これが「溝内埋葬」にあたるものかどうかは、現在検討中である。またこの南側に隣接して、先行する円弧状の溝（前期中葉）があるが、これが周溝墓の一部とすれば、今回検出した周溝墓群の中で唯一墳丘の大半が重複する事例となる。

4群は、方形周溝墓1基と円形周溝墓1基か



写真10 周溝墓2 壘出土状況



写真11 周溝墓7 鉢出土状況



写真12 周溝墓6 壘出土状況

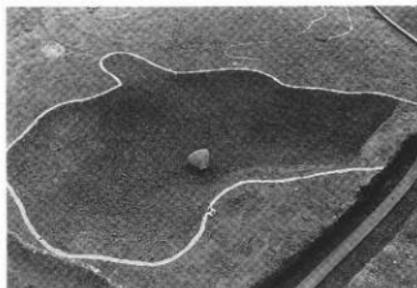


写真13 周溝墓24 鉢出土状況

らなる。現在でも地下水位が高いためにベース土ならびに遺構埋土が変色しており、遺構の検出は必ずしも容易ではなかったが、Ⅴ区の周溝墓群とは若干の空地を挟むようである。周溝墓22は、周溝墓23の周溝埋土を切り込んで構築されており、前者が後者に後出する。

周溝墓から出土した主要な土器を図14・15に示した。完形で出土したものは全て図示してある。図14-1は、周溝墓2で周溝墓3と接する溝底から出土した如意状口縁甕である(写真10)。口縁部は短く外反し、端部に刻みが施される。また体部内外面にやや粗い縦方向のヘラ磨きがなされる。弥生前期後葉～末の所産であろう。2～4は、周溝墓6の周溝から出土した土器である。2は、底面が若干浅くなる南側周溝から、やや浮いた状態で出土した(写真12)。上下に長く伸びた形態を呈しており、頸部から口縁部にかけて縦ハケののちに横方向の磨き調整が散漫に行われる。体部は縦方向のヘラ磨きが密に施される。前期末～中期初頭の幅で捉えられよう。3は肩部に沈線を伴うやや大型の広口甕であり、2よりも古い様相をもつが、細片であることから埋没過程での混入の可能性を否定できない。4は多条化した沈線を施す甕の破片である。時期的には2とさほど大きくは矛盾しない。5は、周溝墓7の北西隅に近い周溝の、底面より若干浮いた位置で出土した鉢である(写真11)。直立して突出する分厚い底部をもち、板ナデ調整が顕著である。時期については限定は困難であるが、前期末～中期初頭の幅で捉えることができよう。6～8は、円形周溝墓8の周溝内埋土の上位層から出土した。6はヘラ描きもしくは半截竹管による沈線が施されており、同一個体の口縁部内面には貼り付け突帯がみられる。7は櫛描きによる直線文と波状文が施される。これらはやはり前期末～中期初頭に位置付けられよう。9は周溝墓24の周溝底面から出土した鉢である(写真13)。前期末頃に位置付けられよう。図15は周溝墓21の周溝底面から出土した無頸甕である。口縁部と底部に2個1対の円孔が2箇所にあけられている。体部上

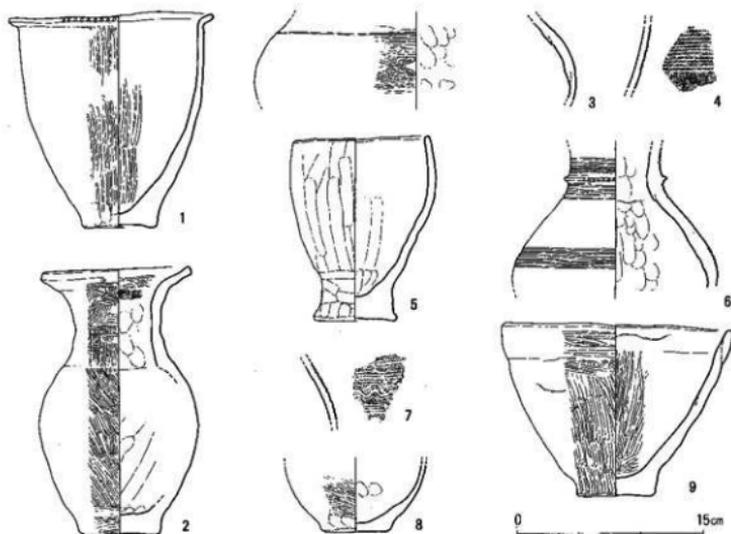


図14 Ⅲ区周溝墓群出土土器 (S=1/4)

半には柳指きの直線文・波状文，刺突文が施され，中期初頭の所産であることを示す。また周溝墓1からは，逆し口縁甕とともにサヌカイト製の石鉢が周溝内より出土している（図16-1・2）。

以上のように，現段階では各周溝墓の細かな時期まで特定するまでは至っていないが，1群がおおよそ前期後葉～末，2群が前期末～中期初頭の幅の中でおさえることができよう。3群も2群とはほぼ同じ時期とみられるが，周溝墓21のように確実に中期初頭にまで下る事例もみられる。4群については現段階では明確にできないが，上記のいずれかの時期に該当しよう。

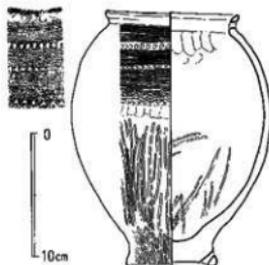


図15 周溝墓21出土土器（S=1/4）

(4) 弥生時代後期の遺構・遺物

概要 当該期の遺構には，竪穴住居4棟，土器溜まり1箇所，大溝1条がある。竪穴住居と土器溜まりは，Ⅲ区東半部の微高地東斜面にみられ，北側の一群（竪穴住居4・土器溜まり1）と，南側の一群（竪穴住居3・5・6）に分けられる。時期的には竪穴住居5が後期後半頃とみられるが，他は後期初

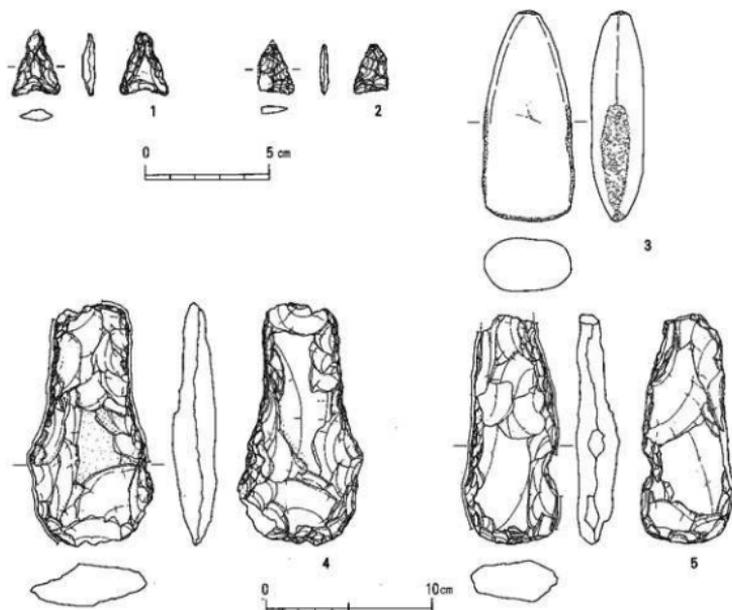


図16 弥生時代の石器（1・2はS=1/2，3～5はS=1/3）

頭の所産である。後期初頃の竪穴住居群は、小規模なもののみで構成される。竪穴住居4床面と土器溜まりからは多量の土器が出土しており、良好な一括資料として捉えられよう。後期後半の竪穴住居5は焼失家屋であり、炭化材(柱材・板材)や屋根の構造にとみられる焼土塊が多量に検出された。大溝2は、弥生前期の大溝1とはほぼ平行して延びており、幅1.2m、深さ0.7mを測る。埋土の状況は、大溝1ほどの頻繁な再掘削の痕跡を残しておらず、比較的短期間で埋没したものと考えられる。後期後半～終末頃の弥生土器壺が出土している。(佐藤)

竪穴住居4 平面形は長方形を呈し、長辺2.9m、短辺2.28mを測る。北辺の一部は調査区外へ延びる。検出面から床面までの深さは、0.22mである。床面より柱穴を6穴確認したが、住居内の位置関係から支柱穴を断定することはできなかった。また、その全てが竪穴住居に関するものなのかどうか、

不明である。中央ピットは確認されず、床面・埋土に炭・焼土等は全く確認されなかった。また、壁際に幅0.16m、深さ0.08mの壁溝を確認した。遺物は主に床面上の3箇所から検出された。3箇所とも弥生土器壺などが積み重なる状態にあった。(川井)

図18は、床面出土土器である。器種としては、壺が1点みられる他は全て甕で占められる。1～4は、いずれも拡張した口縁部にやや退化した凹線が施されるが、1・2はいわゆる下川津B類土器であり、器壁が薄く成形されている。3～6は砂粒が多い胎土をもち、遺跡周辺で製作された土器群とみられる。(佐藤)

(佐藤)

(5) 古墳時代後期の遺構・遺物

概要 竪穴住居2棟、掘立柱建物15棟、井戸と考えられる土坑1基、大溝2条などが検出された。いずれも特徴的な黑色粘土を埋土としており、前後の遺構と明瞭に識別できる。建物群はその分布状況から、I区の一群、II区からIV区にかけての一群、III区からV区にかけての一群、の3群程度に分けることができる。I区では竪穴住居2棟、掘立柱建物9棟が検出されており、他の2者に比して密集度が高い。掘立柱建物はN-13°-E前後を主軸とするもの(建物1・2・4・5・9)と、真北方向前後を主軸とするもの(建物3・6~8)に細別でき、重複状況から時期差を示す可能性が高い。竪穴住居は2棟とも前者

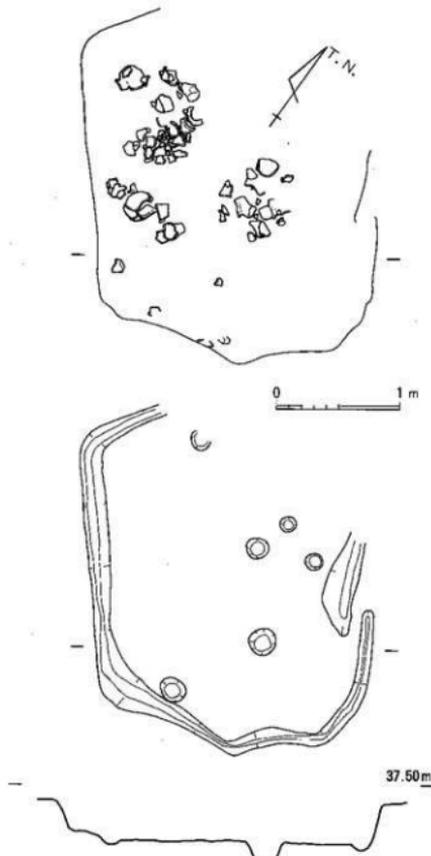


図17 竪穴住居4 平・断面図(S=1/40)

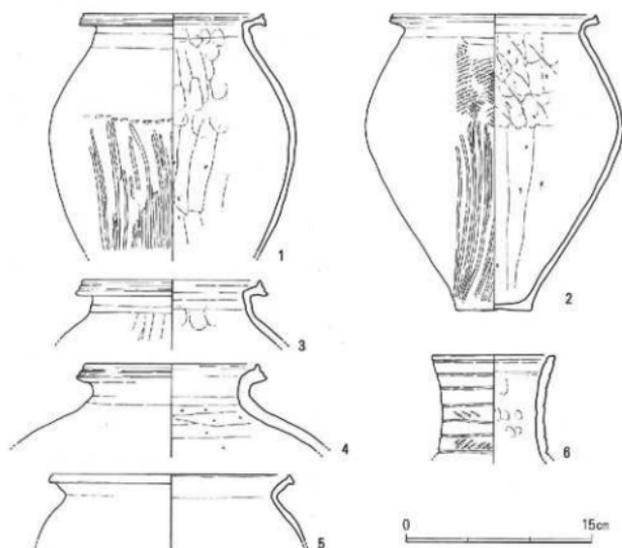


図18 竪穴住居4床面出土土器 (S=1/4)

と同じ軸をもつ。また掘立柱建物には、 2×2 間の正方形プランの建物と $1 \times 2 \sim 3$ 間の長方形プランの建物があり、前者には総柱構造をとるものが多い。Ⅱ区からⅣ区にかけては4棟の掘立柱建物が散在しており、いずれも 2×2 間の総柱建物である。Ⅲ区からⅤ区では2棟の掘立柱建物があり、そのうちの1棟(建物15)は 3×4 間のやや大型の建物であり、立柱後の掘り方内を互層状に埋め戻しているなど、他の建物とは異なる要素をもつ。

大溝はⅠ区からⅡ区にかけて、前代までの大溝とほぼ同じ方位をもって延びている。規模が弥生時代のそれと比して格段に大きくなっており、再掘削も大規模に行っている。

竪穴住居1 Ⅰ区西端部で検出された。南北4.35m、東西3.7mの長方形プランを呈する。中世段階での削平が顕著なため、検出面から床面までの深さは0.07m程度しかない。壁面下端には深さ0.1m程度の浅い壁溝が巡る。主柱穴は4個であり、南側の2個の周辺にはピットが数個あることから、建て替え時に主柱穴の位置が動いた可能性がある。床面中央には南北0.6m、東西0.5m、深さ0.25mの浅い中央ピットがあり、炭化物・焼土を含む埋土が堆積していた。遺物は床面から土師器碗が1個体出土して



写真14 大溝3・4と掘立柱建物

いる。

建物2 I区中央部で検出された、2×2間の総柱建物である。柱穴掘り方の形態は、不整形形のものが多いが、北辺では明確に角をもった正方形を呈する。北東隅の柱穴には柱痕がみられ、直径0.24m前後の断面円形の柱材（丸太材？）を用いたことが想定される。

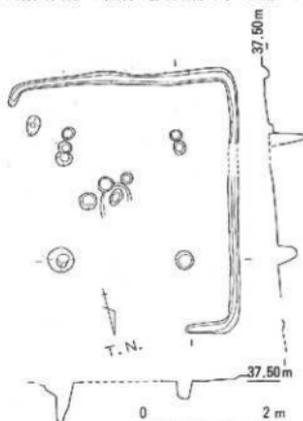


図19 竅穴住居 1平・断面図 (S=1/80)

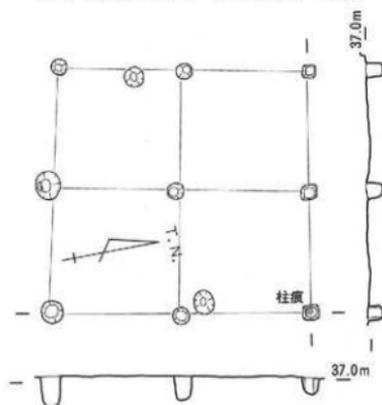


図20 建物 2平・断面図 (S=1/80)

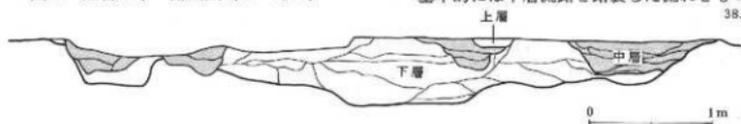


図21 大溝 3土層断面図 (S=1/80)

土坑2 II区西部南端で検出された。東西1.35m、南北0.95mを測り、検出面では平面楕円形を呈するが、底面はほぼ正円形となっている。恐らく本来は正円形プランの掘り方をもっていたが、埋没時に上半部が崩壊して不整形な平面形態となったのであろう。検出面からの深さは0.1mを測り、底面は湧水層とみられる砂層まで到達している。このことから土坑2は、素掘りの井戸であった可能性がある。土坑内の遺物出土状況は、底面より若干浮いたところに土師器甕、須恵器高杯、砥石状の擦痕のある礫が出土した。須恵器高杯(図22-12)は、脚部が完存するもので、やや肉厚な器壁と丸く太い脚端部をもつ。陶器TK23型式頃に相当しよう。

大溝3・4 I・II・IV区で検出された。大溝3は、弥生後期の土溝2の東隅にほぼ平行して延びており、調査区北端部で大溝4が分岐する。埋土の堆積状況から、上・中・下層の3層に大別でき、それぞれの層毎に連続した流路を確認することができた。

下層流路は、褐色系粗砂を埋土とする。幅約6.0~10.7m、深さ1.1mを測り、浅く幅広い底面をもつ。底面最下部の幅は1.8mである。I区からII区にかけては1本の流路であるが、II区北端部で3本に分岐する。また、土層堆積状況を見ると最低1回、埋没後に切り込まれた流路が読みとれるが、色調・土質とも近似するため、平面的な連続としては識別できなかった。中層流路は、暗黒・茶色系粗砂を埋土とする。基本的には下層流路を踏襲した流れをもつが、

幅は最大部分でも5.2mにとどまる。上層流路は、幅0.7m、深さ0.15mを測り、直線的に延びるが、位置的には上・中層流路を踏襲しており、北端で分岐する在り方も上・中層と同様である。ベース土をブロック状に含む淡褐色シルトを埋土とすることから、人為的に埋め戻しが行われたとみられる。

各流路の時期は、出土須恵器からみて下層が5世紀末葉（TK43型式相当）、中層が6世紀後葉（TK43型式相当：図23-1）、上層が7世紀中葉（TK217型式相当：図23-2）を各々下限とすることがわかる。中層からは下層と同じ時期の須恵器が多量に出土しているが、中層流路の掘削時期が5世紀末葉まで遡るのか、流水に伴う下層からの巻き込みなのか、明確ではない。

大溝4は、大溝3北端部から東方向へ直角に分岐する。幅3.5m、深さ1.0mを測り、大溝3の下層・中層部分を共有する。また、出土土器の中に大溝3下層と大溝4下層で接合できる個体があり（図22-19）、両溝ともに同時併存であったことは明らかである。

図22は、大溝3・4の中・下層から出土した土器である。供膳器種では須恵器と土師器が拮抗しており、貯蔵器種は須恵器、煮炊器種は土師器で占められる。須恵器（1-25）は、TK23型式を主体とする。蓋杯（1-8）は、蓋・身ともに外面の回転ヘラ削り調整が広範であり、口縁端部や杯蓋の稜もシャープである。杯蓋の天井部は丸味を帯びており、平坦なものはみられない。またこれとは別に、胎土に粗い砂粒を多く含み、全体に厚く鈍重な器壁と、粗く狭い

範囲のヘラ削りを施す杯身（9・10）がある。10は突帯状の短い受部をもち、土師質焼成である。これらから、9・10は在地窯産の可能性が高い。高杯（11・13-16）には有蓋高杯・無蓋高杯があり、14は強い回転ナドによって挽き出した突帯をもつ。壺（17-21）も一定量みられる。広口壺（18）は口縁端部が上下に拡張し、回転調整によって頸部に2条の突帯を挽き出す。突帯間に波状文を施すが、最上段の波状文は振幅の間隔が不揃いである。陶器窯では同一の形態・文様構成・施文方法の資料を見出せないが、遺跡周辺の事例としては岡田万塚古墳群出土資料と一致しており、在地窯産の可能性が考えられ



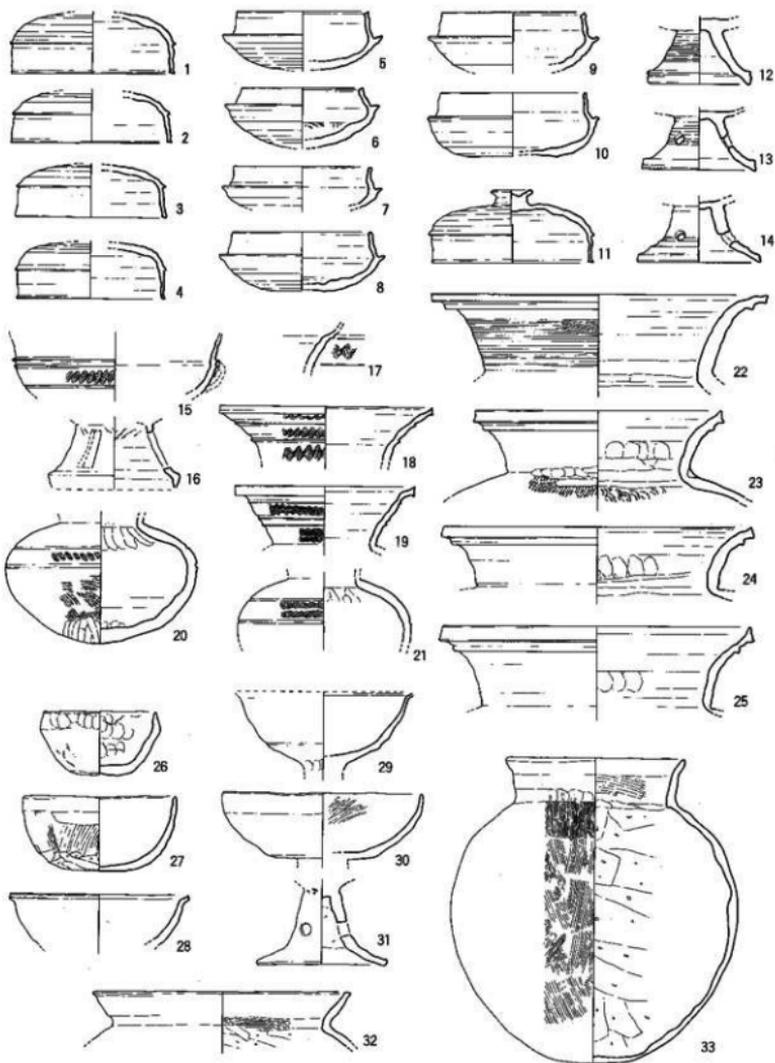
写真15 大溝3中層流路



写真16 大溝3張り出し部



写真17 大溝4須恵器出土状況



1~11, 13~33 大溝 3・4
12 井戸 1

0 10cm

圖22 大溝 3・4、井戸 1出土土器 (S=1/4)

よう。直口壺(20)は体部が完存しており、叩き成形後に底部に静止ヘラ削りを施す。体部には穿孔がみられない。21はハソウカ。甕(22~25)には、断面方形の口縁部直下に突帯を付す古い形態のもの(22)もあるが、端部を拡張気味にしたもの(23・24)や明瞭に強く拡張させるもの(25)など、TK23型式前後に相当する形態が主体を占める。

土師器(26~33)には、新しい形態・技法をもつ一群が存在する一方で、依然布留系の器種も存在する。おそらく布留系器種が存続する最後の段階の資料とみることができよう。杯(26~28)には、外面に皺状の亀裂が顕著な粗面をもつ、手捏ね状のもの(26)がある。あるいは外型成形か。また27は、底部外面にヘラ削り調整を行う。高杯(29~31)は、布留系の最終形態のもの(29)と、新たに普遍化しつつある丸い椀形の杯部をもつもの(30)の両者がともに一定量存在する。脚部の形態は両者ともに共通するが、円孔のみられるものと穿孔しないものがある。甕(32・33)にも布留系のもの(32)と、やや長い球形の体部と単純に外反して丸い端部をもつ新来の形態(33)の2者が存在する。後者は全体に器面調整が粗く、やや丁寧な作巧とは明確に異なる。その他、鍋もしくは甌の把手が数点出土している。

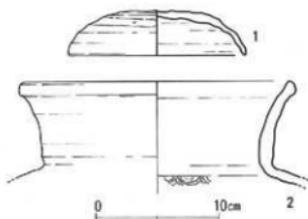


図23 大溝3上・中層出土土器

(6) 中世の遺構・遺物

概要 この時期の遺構としては、掘立柱建物3棟、井戸2基、石積み土坑1基、大溝3条、溝17条などがある。これらは、条里型地割に大きく規制されるかたちで分布している。Ⅱ区西端部には大溝5・6が延びており、両者は芯々距離で6.0m空けてくい違うように収束している。両溝が収束する箇所には、幅1.8mの陸橋状の掘り残し部分があり、大溝沿いに延びる道の存在を想定させる。この想定道路部分は、坪境線である町道佐古川・水橋線(Ⅱ区とⅢ・Ⅳ区の間)から西へ54.5m(1/2町)の位置にあたる。また、大溝5の南端から東へ横列が延びて建物11の南縁に至るが、この東西線付近が坪境にあたる。大溝7は、町道佐古川・水橋線よりも東に1町の位置に開削された坪境の溝である。大溝5・6からは、13世紀代の土師質土器杯や漆塗りの織物片が出土しており、大溝7からは、13世紀後葉~14世紀後葉の十瓶山窯産須恵器杯や土師質土器足釜、また国分寺楠井遺跡産の土師質挿鉢(挿鉢AⅣ類)、曲物桶が出土している。

掘立柱建物は現在3棟復元できるが、Ⅰ区からⅡ区中央部にかけて約400個の中世ビットが

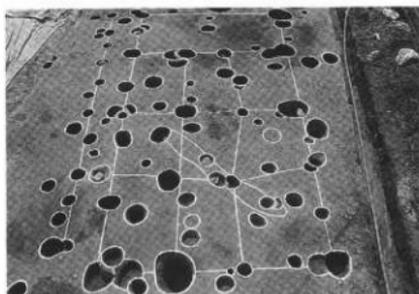


写真18 建物10



写真19 建物11に伴う小溝

検出されているため、本来はさらに多かつたことが予想される。建物10・11は総柱構造であり、床束をもつことが想定される中・大型建物である。ともに柱穴掘り方もしくは柱の抜き取り穴に、被熱が著しい壁土とみられる焼土塊が含まれている。これらは掘り方出土遺物や建物に伴う小溝出土遺物より、13世紀後半～14世紀頃の所産とみられる。建物の復元には至らないピットには、11世紀後半～12世紀前半の土師質土器杯や黒色土器碗を含むものがあり、建物群は2時期に大別されよう。(佐藤)

土坑3 I区東端部において検出された遺構である。掘り方平面形は長円形を呈し、長径4.1m、短径3.05mを測る。底部はほぼ平坦であり、検出面から底部までの深さは0.96mである。また、遺構内には石積みが確認された。底部より2段小口積みにされ、石積みの高さは0.4mになる。石積みの平面形

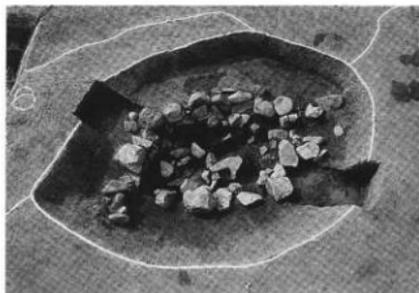


写真20 土坑3

は長円形を呈し、大小の自然石や割石が混在する。埋土下位には、暗黒色粘質土層が堆積しており、一定期間滞水状況にあったことがわかる。このことから、この遺構が水溜めとして利用されたことが推測される。一方、埋土中より、土師質土器の小皿・杯・鍋・足釜、中国産の青磁碗、十瓶山窯産の須恵器碗・壺、国分寺楠井遺跡産の須恵質播鉢などが出土した。これらの遺物は、14世紀後半頃を下限としており、埋没時期が建物群の継続時期と一致しよう。(川井)

井戸2 III区東半部で検出された。井戸の周辺とIV区には同時期のピットが散在するが、主屋となるものが検出できなかつたことから、集落から離れたところに存在していたと考えられる。直径1.55mのやや楕円形の掘り方に、一辺が0.9～1.0mのほぼ正方形の井戸側をもつ、縦板組隔柱横棧どめ井戸である。検出時には、幅0.1m前後の縦板が井戸側に立てかけられ、上下0.13m程度の間隔をあけて横棧が2本、北壁・西壁・南壁では確認できた。また隔柱も4本検出された。隔柱は、先端を加工して尖らせ、井戸底に打ちつけていたと考えられ、北東の隔柱のみほぞ穴が残っていたが、他3本には認められず、横棧との関係は明確ではない。検出面から井戸底までの深さは1.35mであり、さらに0.17m下の中央で、直径0.43mの水溜用曲物も検出された。

井戸2 III区東半部で検出された。井戸の周辺とIV区には同時期のピットが散在するが、主

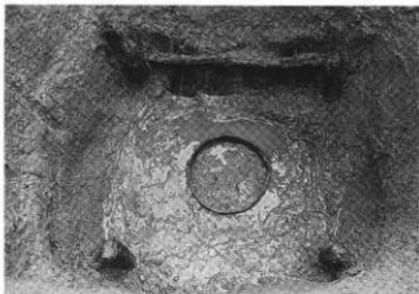


写真21 井戸2隔柱と水溜め

遺物出土状況は、上層部分が井戸側に添う状態のものや、中央に散在しており、一括投棄されたと考えられる。ほぼ完形で出土しており、土師質土器杯は口径14.0～14.8cm、器高3.0～4.3cmを計る。底部はへら切り痕が残り、糸切りはみられない。また和泉型瓦器碗が3点出土しており、尾上編年のII～3段階～III～1段階にあたる。これらは、井戸廃棄時の祭祀に使用されたと考えられ、12世紀末葉頃に埋め戻されたと推測される。(中山)

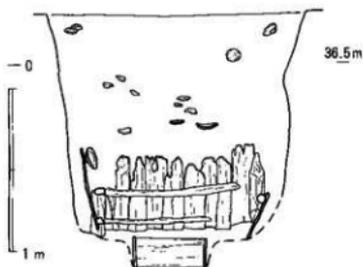
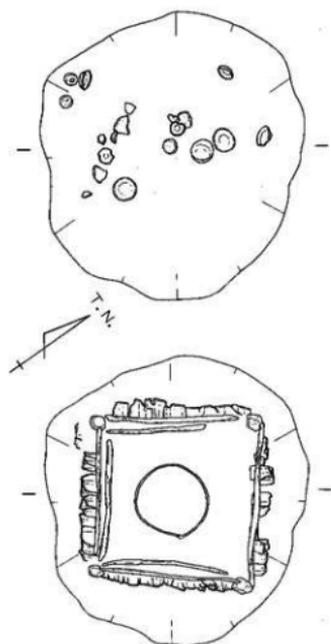


図24 井戸2平・断面見通し図 (S=1/30)

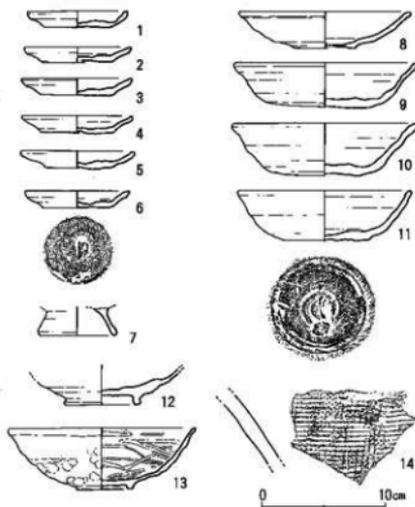


図25 井戸2出土土器 (S=1/4)

(7) まとめ

以上のように、佐古川・窪田遺跡で検出された遺構・遺物の内容は多岐にわたり、それら全ての評価までには到底及ばないが、周溝墓群の群構成と調査成果から想定される地域開発の在り方をまとめたい。

周溝墓の群構成 既に記述したように、佐古川・窪田遺跡で検出された周溝墓群は、弥生時代前期末葉を中心として中期初頭まで確実に下るものを含んでいるが、1・2群でみられた周溝の共有形態や相互の位置を意識したような近接状況からみると、周溝墓が一定程度埋没する程度の時間幅で各群が形成された可能性がある。この想定が妥当であれば、出土遺物の示す時期

からみて大局的には1群→2群→3群という流れを理解することができるが、2群と3群は継続期間の一部が重複するようであり、複数の群が併存しながら墓域が形成されたとみ方がよいであろう。墓域の拡大方向は、微高地の頂部から谷底部へ向かう東斜面へと及んだことになる。

各群は、どのような単位として理解することが可能だろうか。2群の周溝墓では先述したように、大型の周溝墓7と小型周溝墓11~14が周溝を共有して連続していた。埋土の連続関係や周溝の形状から、

これらは周溝墓7の存在を前提として小型周溝墓が継続的に構築されたことを明確に示しており、相互の関係がかなり緊密であることは明らかであろう。主体部は遺存していなかったが、周溝墓3・8・15~17の状況から、大型・小型にかかわらず主体部が1基の単葬墓である可能性が高い。周溝墓7と11~14の規模の格差が埋葬主体の数に起因するものではないこと、またこれらが周溝墓7の構築を契機にすることを考慮すれば、これらは血縁関係をもつ一つの集団（与家族）のまとまりを反映する可能性があるが、各墓が単葬の可能性が高いため、岩松保氏のいう「単位墓」と「単位墓群」の中間的な横相（墳丘を異にする単位墓）をもつようである。また、周溝外縁が近接する周溝墓相互の関係は明確ではないが、周溝を共有するには至らない近縁の集団構成員が葬られているとみて大過なからう。すなわち各群は岩松氏のいう「単位墓群」に該当するものと思われるが、周溝を共有するまとまりと周溝を近接させるまとまりとの間には、構築背景や契機に若干の差異が存在する可能性がある。なお各群には、密集する中にもわずかな空地の連続が読み取れ、そこに面して周溝の途切れるものがあることから、いわゆる「墓道」的な在り方を示す（図26）。

各群を上記のようにみることができるとしても、「単位墓群」内で方形プランと円形プランが併存する背景を理解することは難しい。そもそも既に記述したように、円形周溝墓も方形周溝墓同様の陸橋状の底面がみられること、またともに単葬とみられることから平面形態以外に両者の本質的な差異を指摘することは困難である。さらに大型の周溝墓である周溝墓7（方形）と8（円形）は、周溝北端と南端の位置がほぼ同じであり、周溝墓7の東辺（周溝墓8に隣接する部分）は直線的ではなく円弧を描いて延びている。両者の強い結合意識を読みとることができる。弥生前期～中期の事例をみると、摂津地域は東武庫遺跡のように方形のみで占められ、播磨・丹波地域では方形主体で円形が少数群。備前地域では現在知られる限り円形主体のようである。讃岐では本遺跡も含めて方形・円形がほぼ同率存在するとみてよからう。両者の併存は、「一遺跡内における被葬者層の出自の違いに起因する」可能性が指摘されているが、こうした地域差をどのように整合させて理解するかは明確化されていない。近年、韓国では方形・円形周溝墓が検出されつつあるが、大陸起源の墓制の系譜の違いとそれを受容した地域社会の構造の違いという観点からも検討を進めていく必要がある。

当遺跡の周溝墓群と他の事例を比較してみる。前期の事例としては、龍川五条遺跡（普通寺市）や百間川沢田遺跡（岡山市）で周溝墓とともに土壇墓・木棺墓が検出されている。周溝墓相互の位置関係も、近接してはいるが当遺跡の各群の緊密さがみられず、やや粗放な墓域の形態をとる。当遺跡の周溝墓群は、土壇墓・木棺墓を伴わず相互の密集度が高い点で、単独の中小規模集落に伴う墓域とは構成原理をやや異にする可能性が指摘できよう。

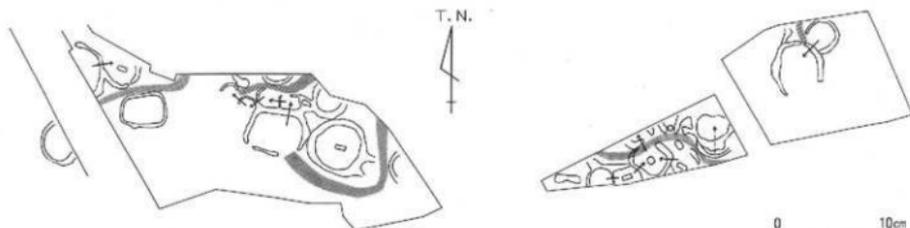


図26 想定される構築順序と「墓道」状の空地地

以上、群構成について思い付く限りの所見をまとめたが、概報作成の現在も周溝墓の調査は継続しており、またⅢ区とⅤ区の間は平成10年度調査予定である。このため今後、周溝墓群全体についてさらに多くの知見が得られるものと思われ、多くの課題は来年度調査を踏まえて議論を深めたい。

地域開発の在り方と画期 本遺跡と予備調査の成果、また周辺での調査所見などを踏まえて地域の開発史を素描しておく。まず地形条件として、栗熊・富熊地域の平野部には南北方向に延びる微高地がある。中大東川以東の微高地は大別5箇所あり、それぞれ微高地1～5の番号を付した。佐古川・窪田遺跡の位置する微高地1は、約700m北方で行末の独立丘陵（行末丘陵と仮称）との間に埋没河川らしい凹地を介在させる。また微高地1と微高地2の間は、奥の幅が広く出口の幅が狭い湿潤な谷部が広がる。

栗熊地域での本格的な開発の初現は、弥生時代前期後半～末葉と考えられる。行末遺跡（行末丘陵）・佐古川遺跡（微高地1）・馬指地区（微高地2）で当該期の集落が確認されている。ただし佐古川遺跡では集落縁辺が検出されたのみであり、周囲の地形や当遺跡Ⅰ区でみられた廃棄土坑の存在などを考慮すると、集落本体は佐古川遺跡と当遺跡の間の微高地上にあると推測される。また若干先行する包含層が次見遺跡（微高地5に接する丘陵）で確認されており、九亀平野北半部と連続する平野部で開発の先駆が認められる。微高地1では、本遺跡と佐古川遺跡でこの時期の大溝を確認しているが、これらは流路の方向から中大東川の支流菟谷川から微高地1を斜めに横断するものとみられる。つまり、微高地1西側から取水して東側もしくは微高地1の先端に配水するための灌漑水路である可能性が高い。微高地1・2の間の谷部は排水条件が悪いため、用水路で管理されるかたちの水田開発の対象からは除外されたであろう。当遺跡の周溝墓群は、この谷部に面した微高地1南端の頂部から東斜面にかけて分布しており、生産域から取り残されたところに墓域の設定が行われたと捉えることが可能である。ところで集落の分布を考えると、微高地1のような開発が微高地3・4・5でも展開した可能性があり、高松平野で指摘されているような微高地単位の開発と労働力の結集が行われたとみられる。先に周溝墓群を単一の小集落に伴う墓域とは様相が異なると指摘したが、それが微高地を単位とする小集落群に伴うものなのか、より上位の複数の微高地を包括する地域社会の所産なのか問題となろう。いずれにしてもこれらの集落・大溝・周溝墓群は、前期末～中期初頭を下限としてそれ以降は継続しておらず、そこに地域社会全体を覆う新たな変動が生じたことを推測させる。

弥生時代後期には、再び集落・大溝・墳墓の様相が明確化する。当遺跡の大溝1中層は、後期に再掘削され、これと平行して大溝2が新たに開削される。またⅢ区では堅穴住居群が形成される。新たな集落の成立と大溝の再整備が全くの無関係とは考えられないが、堅穴住居は概ね小規模なものであり、とてもこの小集落の集団のみで達成し得ると思えない。少なくとも微高地単位での集団関係の再編が進み、再び地域開発が活発化したことを示唆するものであろう。これは古墳時代前期まで続くようであり、佐古川遺跡では古墳前期の堅穴住居とともに大溝が検出されている。ただし予備調査の所見に拠る限り、この段階でも微高地1と2の間の湿潤な谷部には積極的な開発の手は及んでいないようである。馬指地区でも弥生後期後半の大溝が検出されており、おそらく中大東川から取水して馬指川に排水する幹線水路とみられる。このことから、微高地3においても同様な動きが生じていたと考えられ、来年度の調査成果が期待される。また微高地5縁辺の丘陵斜面では、次見遺跡で当該期の堅穴住居5棟が検出されており、明確ではないがこの地域開発の再編が進行した可能性を指摘できる。弥生後期後半～古墳前期の墳墓・古墳群の分布は、このような地域単位の動向を端的に反映しているようにみえる。定連墳丘墓や石塚山4号墓を嚆矢とし、平尾古墳群・石塚山古墳群など小規模な前方後円・前方後方墳群へと継

続する一群は、微高地1背後の丘陵地帯に形成される。また微高地2・3背後の東大東川上流の丘陵部にも、前期とみられる円墳群が展開する。さらに微高地5背後の横山山塊には、前方後円墳群が形成されており、行末丘陵以北の平野部を基盤とした集団の墓域とみられる。これらは個別の微高地内での集団の結合関係を反映すると考えるが、古墳前期後葉に出現する快天山古墳は規模や埋葬施設、また円筒埴輪を伴う墳丘、陪葬の可能性をもつ墳丘裾の箱式石棺群を伴う点で、これらの諸集団のみならず周辺地域をも統括する、より上位の首長の存在を示すとみ方がよいであろう。

古墳時代後期の地域開発の動きは、古墳前期から直接継続するものなのか、若干の断絶期間を伴うものなのか明確ではないが、5世紀末葉（TK23型式相当期）頃から顕在化する。佐古川・窪田遺跡では、竪穴住居2棟と掘立柱建物15棟、井戸1基が確認されており、既に記述したように3群程度にグループ化された。建物構成では、頻繁な建て替えを伴う2×2間の総柱掘立柱建物（倉庫）が卓越することが大きな特徴であり、これらの周縁に竈を未だ導入しない均質的な竪穴住居が分布する。こうした形態の集落は、太田下・須川遺跡（高松市）でも確認されており、当該期の小集落の普遍的な一形態を示すとみられる。ただしほぼ同じ時期の空港跡地遺跡では、限られた調査区ではあるが倉庫らしい建物は検出されておらず、倉庫の多寡に一集落にとどまらない何らかの要因が働いていることが想像される。当遺跡で検出された大溝3・4の存在や、太田下・須川遺跡で検出された大溝群は、この要因を説明する材料となろう。つまり、大規模な灌漑水路という、単一の集落では到底なし得ない施設に隣接して倉庫群の卓越する集落が存在するのであり、やはり微高地を単位とした地域開発という側面から、この集落構成を捉える必要があるのではないかと考えるのである。その大溝3・4は、規模が従来のものよりも格段に大きく、より微高地頂部に近い位置に流路をもつ。また、調査区内では先行する大溝1・2から分岐する小溝がみられないが、大溝3は大溝4をはじめ複数の溝に分岐している。このことは、微高地とその縁辺部の耕地化が、より面的に広範に行われた可能性を示唆する。しかも7世紀中葉まで規模を縮小しながらも最低2回再掘削が行われており、継続的な灌漑網の維持・管理が行われていたようである。しかし依然として、微高地1東側の谷部には開発が及んでいなかったとみられる。なお、このような大規模な灌漑水路の整備にもかかわらず、3-1で触れたように周辺地域はこの時期の古墳に乏しい。大溝3中層の段階には、南方丘陵部に中型の横穴式石室をもつ宇間神社古墳が築造されるが、それに先行する有力墳については明らかではない。

実態不明な古代を経て、中世に再び地域開発の動きが活発化する。当遺跡では、11世紀後半～12世紀前半にピットが増加することから、この時期に集落が出現することがわかる。さらに13世紀後半～14世紀代には、条里型地割の環境毎に溝が開削され、集落も地割に明確に規制されるようになる。11・12世紀の集落が、条里型地割に規制されていたかどうかは、今のところ建物群の復元に至らないため、今後の課題である。いずれにしても溝の状況から、13世紀頃を新たな地域灌漑網の成立期と見て大過なかならう。またこれに伴い、微高地上の削平による平坦化もかなり進行したものとみられる。I・II区では、基盤層上に11～15世紀頃の遺物を含む中世包含層が部分的に堆積していたが、その下の竪穴住居1の遺存状況から、少なくとも数10cm程度の面的な削平が行われたものとみられる。馬指地区（微高地3）では、馬指川に面した谷部が古代を通じて埋積し（6トレンチ5層下位）、その上には15世紀を下限とする土器を含む耕作土（3～5層）が水平堆積していた。また微高地上では、おそらくこの頃の条里型地割に規制された小溝が検出されている。このように、栗熊地域に条里型地割による規格的な開発が進んだのは中世段階とみることができるが、微高地1と3では微妙な時期差が存在するようである。馬指地

区より細かな中世の状況は、来年度の本調査で詳細が明らかになるだろうが、馬指川の流路固定化の大きな契機となったとみられる渡池の構築時期の問題とからんで、成果が期待される。なお、微高地1・2の間の谷では、中世前半の遺物を包含する強粘性の黒色粘土が堆積しており、依然この段階でも開発から取り残されていたといえよう。

近世以降については、調査所見からは明らかにできないが、見通しとしては中世の開発を踏襲するかたちで、細かな起伏を無視したより広範な開発が進行したとみられる。栗熊・富熊地域の石高をみると、近世前半（栗熊郷）には2,933,843石であったのが、近世後半（栗熊村・富熊村）には4,172,175石に増加している。栗熊村と富熊村の石高を比較すると、前者が後者の約1.3倍であり、広い平野に乏しい栗熊村の石高の方が高い。このことは、近世を通じて平野部背後の谷部や低い丘陵部の開発が進んだことを窺わせる。これは、渡池を潰して構築された三ツ池など、山間部の堤高の高い溜池群の構築により、従来の河川灌漑では開発不可能だった地域まで耕地化が進んだことが背景にあらう。また微高地1は水橋池や津畑池など、谷出口に構築された大規模な溜池によって潤作状態となった。微高地1東側の湿潤な谷部も、近世末～明治期に埋め立てられ（栗熊地区3層）、竹樋埋設による排水網の整備を契機として水田化が達成され、その際に周辺から延伸するかたちで条里型地割が整備されたようである。

以上、栗熊地域の開発史を考えてみた。いうまでもないが、考古資料という性格上、素描した地域史像をより確かなものにするためには、かなりの調査成果の蓄積と資料の読み込み・解釈の継続が要求される。今後の調査の進展に期待したい。（佐藤）

主要参考文献

- 綾歌町 1971『綾歌町史』
- 岩松 保 1992『墓域の中の集団構成（前編）』『京都府埋蔵文化財情報』第44号 朝京都府埋蔵文化財調査研究センター
1992『墓域の中の集団構成（後編）』『京都府埋蔵文化財情報』第45号 朝京都府埋蔵文化財調査研究センター
1992『溝内埋葬と方形周溝墓』『究班』埋蔵文化財研究会
- 山田清朝・中村 弘 1995『東武遺跡』兵庫県教育委員会
- 宇野隆夫 1989『井戸考』『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』筑陽社
- 甲斐輝光 1992『円形周溝墓について』『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会
- 岡本健司 1990『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会
- 近藤武司 1994『定遠遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報』平成5年度 香川県教育委員会
1996『行末西遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報』平成7年度 香川県教育委員会
1996『佐古川遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報』平成7年度 香川県教育委員会
- 川野正雄・武田 明監修 1989『香川県の地名』平凡社
- 大久保謙也 1995『基幹的灌漑水路と灌漑単位』『上天神遺跡』朝香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 山岸良二 1996『韓半島での本格的な方形周溝墓群の発見』『東邦考古』東邦考古学研究会

補注

校正中に調査が進捗し、V区南端部で周溝墓15・16の南側周溝が検出された。その結果、周溝墓15は東西4.2m、南北4.6m、周溝墓16は東西5.2m、南北3.5mと規模が確定した。

さらに、周溝墓15・16の南側に周溝を共有するかたちで新たに2基（周溝墓26・27）が検出された。周溝墓15・16・26・27は「田」字形に規則正しく並列していることになる。周溝墓26では堤丘の西半部に主体部（長方形の土塊）が検出された。さらにV区南東端でも方形周溝墓の一部とみられる溝が検出され、中期初頭の広口遺片が出土した。一応これも周溝墓と考え、周溝墓28とする。なお、周溝墓21と重複する円弧状の溝については、現在も検討中である。

以上、今年度の調査で検出された周溝墓は28基（方形18基、円形10基）となり、それ以外にも検討中の遺溝が数基あることとなった。

Ⅲ. 資料整理の概要報告

鴨部川田遺跡

(1) 本年度整理作業の概要

本年度は平成3年度調査資料について土器類の注記 石器類分類 木器類分類及び実測作業 石器類写真撮影 遺構出土土器類の接合及び実測対象資料の抽出 種実類同定等を実施した。なお平成2年度調査資料については昨年度末で整理作業を終え、本年度「鴨部・川田遺跡Ⅰ」として本報告を刊行した。

以下、整理作業で判明した新知見のうち、集落の消長・弥生土偶・石製武器類に限定し簡単に述べる。

(2) 弥生集落の消長

鴨部川田遺跡は大川郡志度町鴨部の鴨部川右岸沖積平野に所在する。平成2・3年度の調査では鴨部川右岸堤防下から東方約200m強の範囲を全面発掘した。調査区の中央で南西―北東に向けた卵形の長さ70m強・短径60m強の環濠集落を検出した。環濠内部では遺構密度は極めて高いが、その外方においても調査範囲全域に弥生Ⅰ期～Ⅱ期初頭の遺構・遺物包含層が広がる。平安末以前の地表面は調査区西端、鴨部川堤防下で最も高く東方にわずかずつ下がる。かつては現鴨部川河床部分まで微高地が連続していた可能性が高いが、隣接部分の遺構密度はかなり希薄で調査区西端がほぼ集落域の西縁に当たると見られる。また調査区東端は微高地東縁辺に達していないが遺構密度はかなり低い。したがって環濠圍繞部分を中心に鴨部川田遺跡の弥生集落は東西方向で200m強程度のひろがりが見られる。

さて平成3年度調査調査概報では、主に環濠出土資料の観察所見に基づき、同集落の盛期を弥生Ⅰ期後葉を中心とする比較的短期間と推定した。しかし今年度の整理作業の結果、環濠内外の土坑資料に、口縁部の折り返しの緩やかな如意状口縁を呈し、直下に篋状沈線1～2条もしくは段を有する甕と、肩部に鈍い段を有し木葉紋や重瓜紋を付す壺などⅠ期前半に比定すべき資料が散見されることが判明した。また少なくともⅡ期初頭に下ると見られる櫛状沈線文を備えた壺甕類は環濠最上層資料以外にも内外の土坑資料などに一定数存在することも確認した。したがって集落の盛期がⅠ期後半にあって、集落域の一部を圍繞する環濠がこの段階で整備され、Ⅱ期初頭までにその機能を終えていることは動かないが、集落総体としてはⅠ期前葉（ただし最古段階には遡らないと見られる。）～Ⅱ期初頭まで存続したものと、消長についてここで修正しておく。

(3) 弥生土偶

頸部以下を欠損した人頭部造形で環濠北西部下層より出土した。残存全長11.1cm、顔面長8.5cm、幅6.8cm、奥行7cm、頸部径4.5cm前後を測る。粘土塊を継ぎ足しつつ成形した中実の土製品で左顔面の一部、鼻頂、耳葉の先端を剥落する。かなり立体的な造形を指向し特に後頭部および頭部から頸部にかけて人頭部を写実的に表しているかに見えるが、全形は隅丸方柱状を呈し顔面は仮面の如く前面に平板的に表現される。また両眼・口唇はその平面形や配置に一定の写実的配慮が窺えるが、表現方法は単純に篋状工具で穿たれた深い窪みに過ぎない。これに対して、眼窩上隆起から鼻梁は立体的かつ写実的に成形し鼻腔すら表現される。全般的に平板な顔面表現にあって特に強調されて見える。一方、耳葉は人頭部の前面に平板的に造作された鼻目口唇表現に引き寄せられるよう実際より前面に寄せて配置され、鼻梁等の写実的表現とは対照的に低い鰭状の掘り出しにすぎず耳孔も表現されない。こうした顔面表現は単に造形上の稚拙さではなく当該時期におけるこの種の人頭表現の様式的制約と見なすべきであろう。

さてこの人頭表現をより特徴付ける要素として、a上額から後頭上部にかけて頭頂部に縦方向に表現

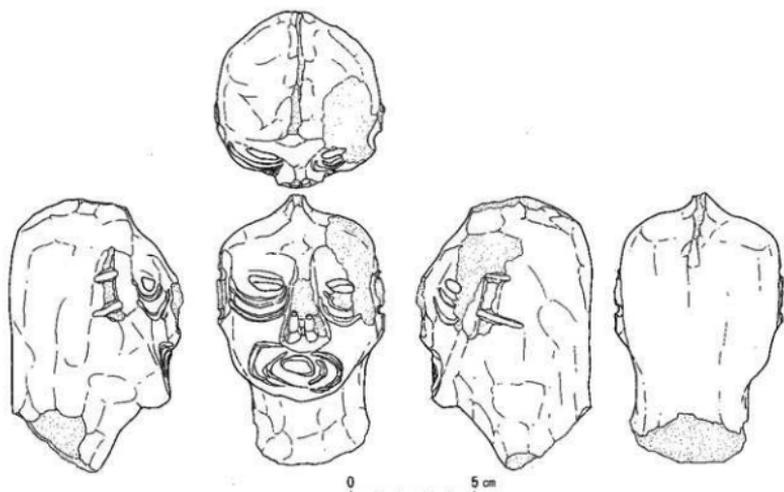


図27 弥生土偶

された鱗状の隆帯，b 入墨表現とされる両眼下の隈取り風の上開き二重弧線と、口唇左右の内向き二重弧線，c 両耳朶に各2ヶ所の切り欠き，d 赤色顔料塗彩がある。

前概報で述べたようにこれらは当該時期前後に東日本で盛行する各種の人頭・顔面表現の様式と共通する部分が多い。要素b～dは縄文時代晩期にみられる土偶の一型式「有髯土偶」の表現上の特色と共通し、要素aもその一部に観察できる。また有髯土偶に続く土偶形容器、人面付壺の顔面表現で、かなり厳格に要素b cが、そしてしばしば要素dが受け継がれ弥生Ⅲ期まで継続する。また平板的な顔面表現も有髯土偶を含めて共通する。しかし本例と同巧の人頭造形は知られていない。

一方、近畿地方以西ではこの種の人頭造形は本例以外に大阪府東奈良遺跡、山口県綾羅木郷遺跡の2例がある。前者は全体に表現がやや稚拙だがほぼ同形同大で平板的な顔面表現とa～dの要素も共通する。後者はかなり小形で要素bの表現が両頬の内向き重弧線に変化するが要素c dは共通する。両例とも本資料と同じくⅠ期後半段階に位置づけられる。なお弥生Ⅲ期～Ⅳ期に瀬戸内海地方を中心に盛行する分銅形土製品と関連資料の顔面表現にも共通する要素が見られる。鼻梁および眼窩上隆起の立体表現と顔面両側（表現されていないが耳朶相当位置）の小穿孔である。これらが、東日本起源の顔面表現様式の一部要素をⅠ期後半の人頭造形を媒介として引き継いだ可能性を考慮する必要がある。

(4) 石製武器および武器形石製品

本遺跡出土の石器類については主要器種の組成と概要を前概報で示した。ここでは以前にほとんど触れていなかった石製武

表4 石鏃型式別重量分布

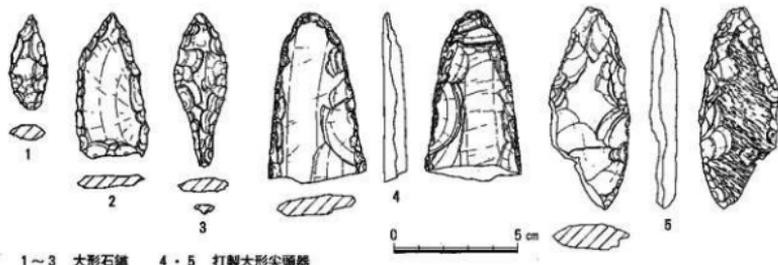
型式	重量 (g)	個数	重量 (%)	個数 (%)
1. 1	0.10	1	0.1	1
1. 2	0.15	1	0.15	1
1. 3	0.20	1	0.2	1
1. 4	0.25	1	0.25	1
1. 5	0.30	1	0.3	1
1. 6	0.35	1	0.35	1
1. 7	0.40	1	0.4	1
1. 8	0.45	1	0.45	1
1. 9	0.50	1	0.5	1
1. 10	0.55	1	0.55	1
1. 11	0.60	1	0.6	1
1. 12	0.65	1	0.65	1
1. 13	0.70	1	0.7	1
1. 14	0.75	1	0.75	1
1. 15	0.80	1	0.8	1
1. 16	0.85	1	0.85	1
1. 17	0.90	1	0.9	1
1. 18	0.95	1	0.95	1
1. 19	1.00	1	1.0	1
1. 20	1.05	1	1.05	1
1. 21	1.10	1	1.1	1
1. 22	1.15	1	1.15	1
1. 23	1.20	1	1.2	1
1. 24	1.25	1	1.25	1
1. 25	1.30	1	1.3	1
1. 26	1.35	1	1.35	1
1. 27	1.40	1	1.4	1
1. 28	1.45	1	1.45	1
1. 29	1.50	1	1.5	1
1. 30	1.55	1	1.55	1
1. 31	1.60	1	1.6	1
1. 32	1.65	1	1.65	1
1. 33	1.70	1	1.7	1
1. 34	1.75	1	1.75	1
1. 35	1.80	1	1.8	1
1. 36	1.85	1	1.85	1
1. 37	1.90	1	1.9	1
1. 38	1.95	1	1.95	1
1. 39	2.00	1	2.0	1
1. 40	2.05	1	2.05	1
1. 41	2.10	1	2.1	1
1. 42	2.15	1	2.15	1
1. 43	2.20	1	2.2	1
1. 44	2.25	1	2.25	1
1. 45	2.30	1	2.3	1
1. 46	2.35	1	2.35	1
1. 47	2.40	1	2.4	1
1. 48	2.45	1	2.45	1
1. 49	2.50	1	2.5	1
1. 50	2.55	1	2.55	1
1. 51	2.60	1	2.6	1
1. 52	2.65	1	2.65	1
1. 53	2.70	1	2.7	1
1. 54	2.75	1	2.75	1
1. 55	2.80	1	2.8	1
1. 56	2.85	1	2.85	1
1. 57	2.90	1	2.9	1
1. 58	2.95	1	2.95	1
1. 59	3.00	1	3.0	1
1. 60	3.05	1	3.05	1
1. 61	3.10	1	3.1	1
1. 62	3.15	1	3.15	1
1. 63	3.20	1	3.2	1
1. 64	3.25	1	3.25	1
1. 65	3.30	1	3.3	1
1. 66	3.35	1	3.35	1
1. 67	3.40	1	3.4	1
1. 68	3.45	1	3.45	1
1. 69	3.50	1	3.5	1
1. 70	3.55	1	3.55	1
1. 71	3.60	1	3.6	1
1. 72	3.65	1	3.65	1
1. 73	3.70	1	3.7	1
1. 74	3.75	1	3.75	1
1. 75	3.80	1	3.8	1
1. 76	3.85	1	3.85	1
1. 77	3.90	1	3.9	1
1. 78	3.95	1	3.95	1
1. 79	4.00	1	4.0	1
1. 80	4.05	1	4.05	1
1. 81	4.10	1	4.1	1
1. 82	4.15	1	4.15	1
1. 83	4.20	1	4.2	1
1. 84	4.25	1	4.25	1
1. 85	4.30	1	4.3	1
1. 86	4.35	1	4.35	1
1. 87	4.40	1	4.4	1
1. 88	4.45	1	4.45	1
1. 89	4.50	1	4.5	1
1. 90	4.55	1	4.55	1
1. 91	4.60	1	4.6	1
1. 92	4.65	1	4.65	1
1. 93	4.70	1	4.7	1
1. 94	4.75	1	4.75	1
1. 95	4.80	1	4.8	1
1. 96	4.85	1	4.85	1
1. 97	4.90	1	4.9	1
1. 98	4.95	1	4.95	1
1. 99	5.00	1	5.0	1
1. 100	5.05	1	5.05	1
1. 101	5.10	1	5.1	1
1. 102	5.15	1	5.15	1
1. 103	5.20	1	5.2	1
1. 104	5.25	1	5.25	1
1. 105	5.30	1	5.3	1
1. 106	5.35	1	5.35	1
1. 107	5.40	1	5.4	1
1. 108	5.45	1	5.45	1
1. 109	5.50	1	5.5	1
1. 110	5.55	1	5.55	1
1. 111	5.60	1	5.6	1
1. 112	5.65	1	5.65	1
1. 113	5.70	1	5.7	1
1. 114	5.75	1	5.75	1
1. 115	5.80	1	5.8	1
1. 116	5.85	1	5.85	1
1. 117	5.90	1	5.9	1
1. 118	5.95	1	5.95	1
1. 119	6.00	1	6.0	1
1. 120	6.05	1	6.05	1
1. 121	6.10	1	6.1	1
1. 122	6.15	1	6.15	1
1. 123	6.20	1	6.2	1
1. 124	6.25	1	6.25	1
1. 125	6.30	1	6.3	1
1. 126	6.35	1	6.35	1
1. 127	6.40	1	6.4	1
1. 128	6.45	1	6.45	1
1. 129	6.50	1	6.5	1
1. 130	6.55	1	6.55	1
1. 131	6.60	1	6.6	1
1. 132	6.65	1	6.65	1
1. 133	6.70	1	6.7	1
1. 134	6.75	1	6.75	1
1. 135	6.80	1	6.8	1
1. 136	6.85	1	6.85	1
1. 137	6.90	1	6.9	1
1. 138	6.95	1	6.95	1
1. 139	7.00	1	7.0	1
1. 140	7.05	1	7.05	1
1. 141	7.10	1	7.1	1
1. 142	7.15	1	7.15	1
1. 143	7.20	1	7.2	1
1. 144	7.25	1	7.25	1
1. 145	7.30	1	7.3	1
1. 146	7.35	1	7.35	1
1. 147	7.40	1	7.4	1
1. 148	7.45	1	7.45	1
1. 149	7.50	1	7.5	1
1. 150	7.55	1	7.55	1
1. 151	7.60	1	7.6	1
1. 152	7.65	1	7.65	1
1. 153	7.70	1	7.7	1
1. 154	7.75	1	7.75	1
1. 155	7.80	1	7.8	1
1. 156	7.85	1	7.85	1
1. 157	7.90	1	7.9	1
1. 158	7.95	1	7.95	1
1. 159	8.00	1	8.0	1
1. 160	8.05	1	8.05	1
1. 161	8.10	1	8.1	1
1. 162	8.15	1	8.15	1
1. 163	8.20	1	8.2	1
1. 164	8.25	1	8.25	1
1. 165	8.30	1	8.3	1
1. 166	8.35	1	8.35	1
1. 167	8.40	1	8.4	1
1. 168	8.45	1	8.45	1
1. 169	8.50	1	8.5	1
1. 170	8.55	1	8.55	1
1. 171	8.60	1	8.6	1
1. 172	8.65	1	8.65	1
1. 173	8.70	1	8.7	1
1. 174	8.75	1	8.75	1
1. 175	8.80	1	8.8	1
1. 176	8.85	1	8.85	1
1. 177	8.90	1	8.9	1
1. 178	8.95	1	8.95	1
1. 179	9.00	1	9.0	1
1. 180	9.05	1	9.05	1
1. 181	9.10	1	9.1	1
1. 182	9.15	1	9.15	1
1. 183	9.20	1	9.2	1
1. 184	9.25	1	9.25	1
1. 185	9.30	1	9.3	1
1. 186	9.35	1	9.35	1
1. 187	9.40	1	9.4	1
1. 188	9.45	1	9.45	1
1. 189	9.50	1	9.5	1
1. 190	9.55	1	9.55	1
1. 191	9.60	1	9.6	1
1. 192	9.65	1	9.65	1
1. 193	9.70	1	9.7	1
1. 194	9.75	1	9.75	1
1. 195	9.80	1	9.8	1
1. 196	9.85	1	9.85	1
1. 197	9.90	1	9.9	1
1. 198	9.95	1	9.95	1
1. 199	10.00	1	10.0	1

器あるいは武器形石製品について述べておく。

a 石鏃 型式・寸法の判明しうる資料は230点ある。すべてサヌカイト製である。個々の時期比定を現段階では経ていないが、総体としては弥生I期後半を中心に一部I期前葉とII期初頭の資料を含むと理解しておきたい。松木武彦氏の型式設定に即して分類すれば凹基式(182点)・平基式(28点)・凸基I式(6点)・凸基II式(8点)に加え、明瞭に茎を作出した有基式(6点)も認められる。凹基式が約7割と他を圧倒することは本地方で縄文時代以来普遍的に認められる様相だが、一定量の凸基I・II式、有基式を含む点は注意を要する。また表4の型式別の重量分布に示したように重量2g以上の大形石鏃が全体の2割に達している。縄文時代後期後半を中心とする永井遺跡(100点)弥生早期の林坊城遺跡(32点)弥生I期中葉～II期初頭の龍川五条遺跡(88点)では2g以上の大形石鏃は8%前後に過ぎない。更に型式別に大形石鏃の出現頻度を検討すると大多数を占める凹基式鏃では重量2gもしくはは全長30mm以上の製品は2.3点1.3%弱に過ぎない。平基式では11点4割弱となる。注目すべきは凸基I・II式・有基式で、各々6点中5点、8点中6点、6点中6点が重量2g以上もしくはは全長30mm以上となり、そのほとんどが大形鏃として用意され大形鏃全体の4割をこれらの型式が占める。

b 打製大形尖頭器 すべてサヌカイト打製品で現在8個体を確認している。環濠下層出土例を含み、出現はI期後半に遡ると見られる。いずれも破損品だが大小2種類に分かれそうである。小形品6個体は全長74～85mm最大幅は34mm前後、厚さ6～10mmと薄い。最大幅は中程より後方であって基部に向かい緩くすぼまる。縁辺部の調整剥離は浅くやや不揃いいため、身部中央に広く大剥離面や自然面を残すことが多く、断面形も扁平なレンズ形を呈する。最大部位より後方の側縁は研磨もしくは敷打によって潰す場合があり、身部中央にも粗雑な研磨が及ぶことが多い。大型品2個体はいずれも先端部片で全形を知り得ないが、2割程度幅広となる。断面形は同様に扁平レンズ状に薄い。少なくとも小形品については石剣とするには短く石槍と見なすのが妥当であろう。基部を柄の先端で挟み込み後方近20mm前後の刃潰し部分を樹皮等で柄と結合固定するのであろう。

c 磨製石剣 環濠下層出土資料でI期後半に位置づけられる。石理の発達した暗灰色の粘板岩質の石材で層状に微細な白色粒を含むため、外表には白色斑紋が縞状に現れる。剣身中程の残存長37mmの小片で型式判別は難しい。幅41～43mmとわずかながら一方に向かって細くなる。表裏両面の中央に明瞭な溝を作出し厚11mmで断面形は扁平菱形をなす。表裏面共、研磨痕と見られる細条線が観察できる。多くは刃縁に斜行するが、部分的に並行方向にもある。また両側縁は更に幅2～3mm程度を直交方向に研磨し、鋭利な刃部を研ぎ出す。



1～3 大形石鏃 4・5 打製大形尖頭器

図28 大形石鏃および打製大形尖頭器

d 木葉形磨製石剣「石矛」 環濠最上層より出土しⅡ期初頭に下る可能性がある。サヌカイト製ながら表面には丁寧な研磨を施す。現存長195mm最大幅70mmを測る。表裏両面に明瞭に鑄を作出し断面形は菱形を呈するが厚29mmとやや肉厚である。先端部、基部などを欠損する。特に先端部は前方からの度重なる衝撃で著しく損傷し、最終的には一面の中央が基部まで縦長に大きく剥落している。隅線の小規模な被損部は補修研磨を試みた形跡がある。残存部の両側縁はほぼ並行し現存端より47mm付近まではほぼ直線的に伸びることから先端直前で急激に閉じる鈍角な切先形状が想定できるかも知れない。同様に基部も余りすばまらず終わる。基部付近の一方の側縁に幅25mm奥行き8mmの浅いU字形の削り込みがある。この部分も丁寧な研磨で仕上げる。残存する器表面全体に研磨時の細条線が密集して観察できる。側縁に斜行・直交方向の細条線が交錯しあまり規則的ではない。また上述した磨製石剣とは対照的に両側縁辺残存部全体を磨り潰しており、その部分に1～2mmの鈍重な面を生じている。この点からは実用的とは見なしがたいが、先に述べたように先端部分への度重なる加撃の形跡を含め検討する必要がある。こうした幅広の剣形を呈し基部の一端に削り込みを設けた磨製品は北部九州を中心に15例以上が知られ、下條信行氏は石矛と推定している。なお類品の破片1点が平成2年度調査資料に含まれる。(報告136P)

e 環状石斧 包含層より1例出土している。径は116mmと平均的な寸法だが、厚さは26mmに達しかなり肉厚で、これにより刃部も鈍重である。内孔は径35mmで両端にわずかに広がり両面穿孔が推定できる。一方の面では内孔の外周に幅10mmの平坦面を設け、その外縁の鈍い稜から刃部に移行する。他面に平坦面はないが、内孔縁から外方に向かう幅12mmの浅い溝を対向する2ヶ所にする。内孔側面には紫雲山資料同様の装着痕と見られる光沢部位と擦痕が観察できる。

以上、鴨部川田遺跡ではⅠ期後半～Ⅱ期初頭に磨製石剣1、木葉形磨製石剣2、環状石斧1の他、石槍、大形石鏃若干量が存在することを示した。同時期の北部九州や畿内地方、あるいはⅢ期以降の本地方における武器保有状況に比べ微弱だが、従来想定されていたよりも早い段階で一応の石製武器を保持することが確認できた。まだ萌芽的な武装状態というべきであろうが本地方ではほぼ同時期、Ⅰ期後半にようやく環濠集落が出現することとの関連を積極的に考慮すべきであろう。鴨部川田遺跡においてもⅠ期後半段階に初めて環濠を構えるのである。(大久保)

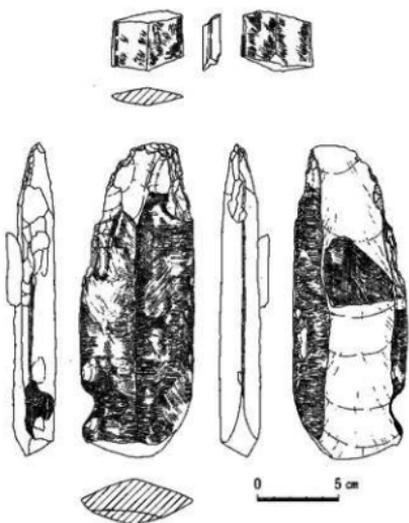


図29 磨製石剣

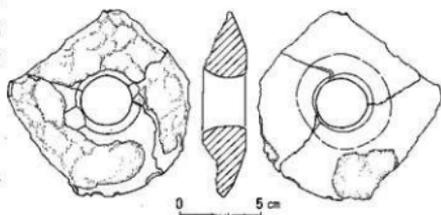
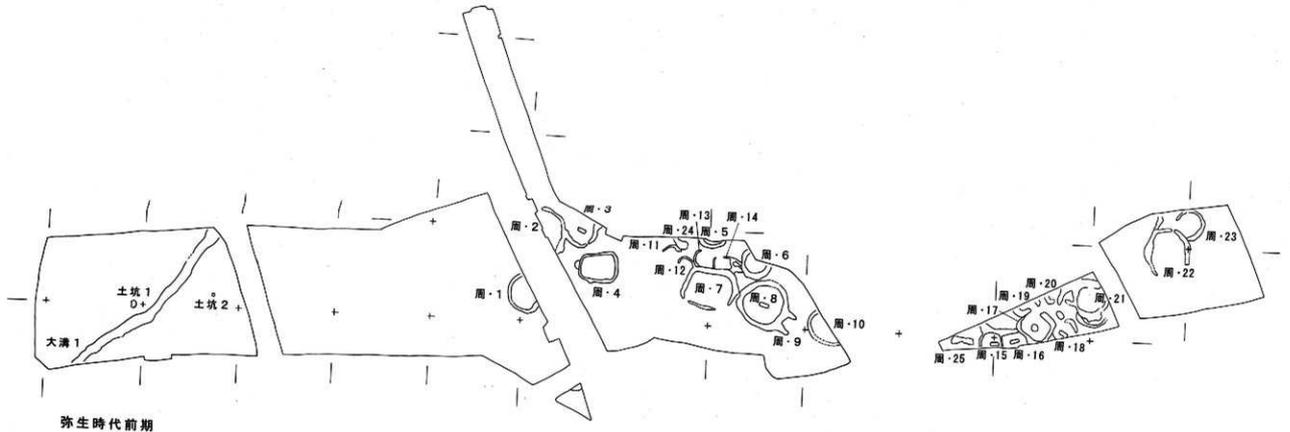
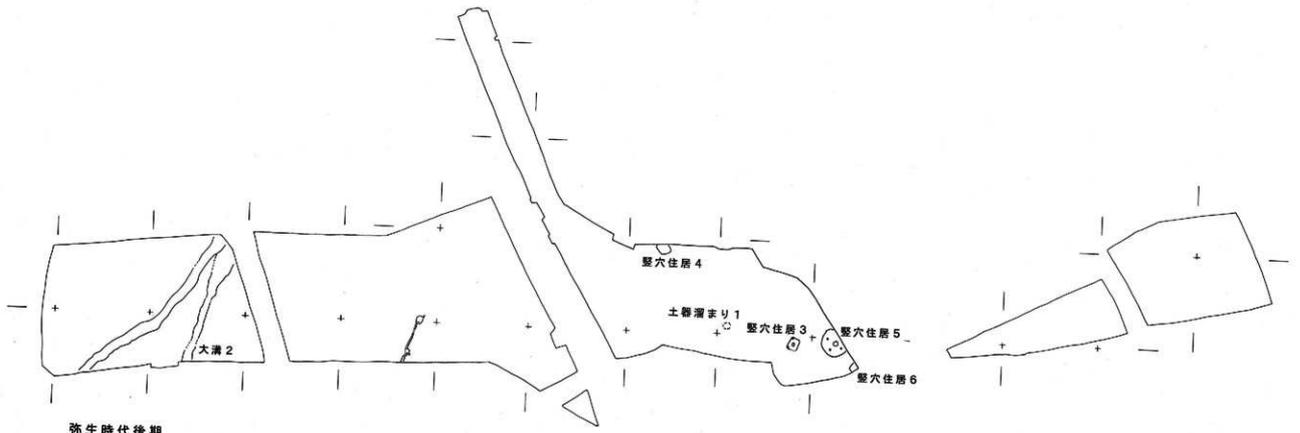


図30 環状石斧

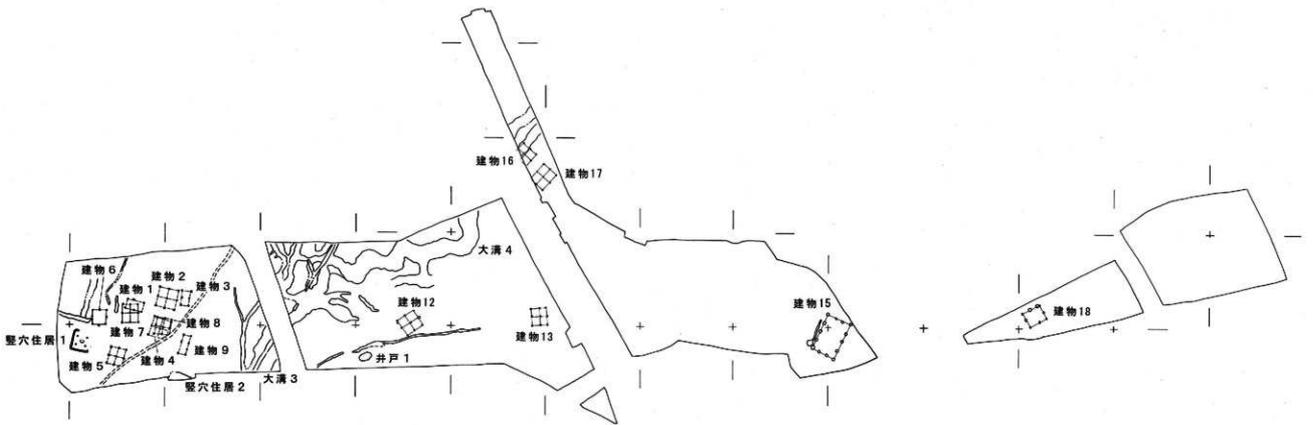
ふりがな	こくどうバイパスけんせつにともなうまいごうぶんかざいはくつちょうさがいほう						
書名	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報						
巻次	平成9年度						
編著者名	藤好史郎・大久保徹也・佐藤竜馬・川井國博・中山高子						
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4				TEL0877-48-2191		
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局						
発行年月日	1998年3月31日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数
46p	3p	43p	0p	0p	30枚	21枚	1枚
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町 遺跡	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
白梅遺跡	香川県綾歌郡綾南町大字小野字白梅	37382	34° 14' 45"	133° 53' 45"	97.04.17 ~97.05.01	348㎡	国道32号綾南バイパス
佐古川窪田遺跡	香川県綾歌郡綾歌町栗原西	37384	34° 13' 45"	133° 53' 0"	97.05.28 ~98.03.19	6,844㎡	国道32号綾歌バイパス
鴨部川田遺跡	香川県大川郡志度町鴨部	37306	34° 17' 45"	134° 13' 15"	—	—	高松東道路
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
白梅遺跡	集落	弥生時代後期	竪穴住居 1		弥生土器		
佐古川窪田遺跡	集落・墓	弥生時代前期 弥生時代後期 古墳時代後期 中世	周溝墓25 大溝 1 竪穴住居 4 大溝 1 竪穴住居 2 大溝 2 竪立柱礎物 15 竪立柱礎物 3 井戸 2		弥生土器・管玉 弥生土器 土師器・須恵器 土師質土器・瓦器		周溝墓群
鴨部川田遺跡	集落	弥生時代前期	環濠・平地式建物 土坑		弥生土器・加工斧・石包丁・サヌカイト人形盤状剥片弥生土偶・磨製石剣・石槍・大形石鏃・木製農具		環濠集落



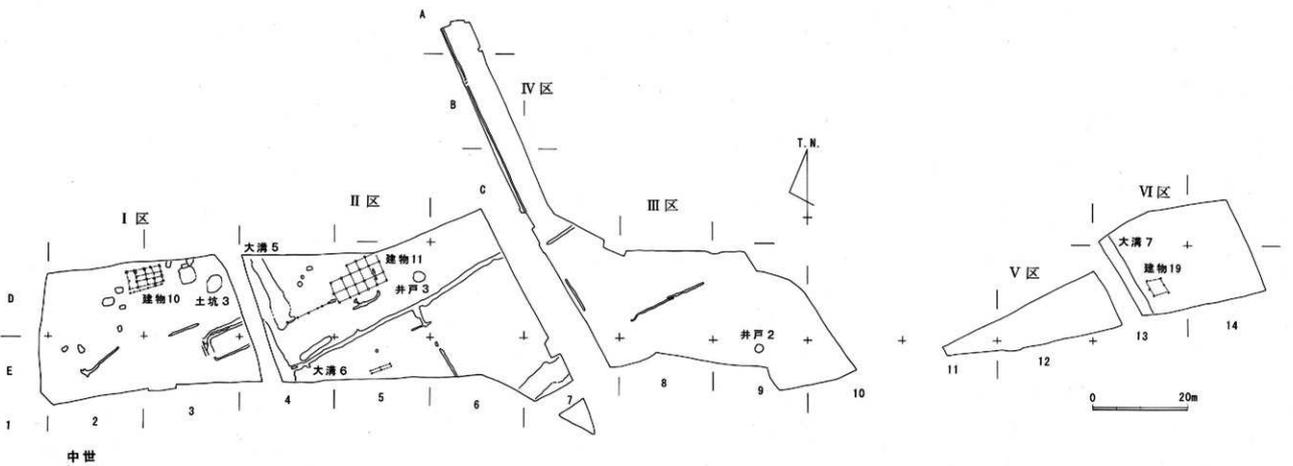
弥生時代前期



弥生時代後期



古墳時代後期



中世

付図 佐古川・窪田遺跡 遺構配置図

国道バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成9年度

平成10年3月31日

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷 株式会社中央印刷所